

第7回 石川県書写書道教育研究大会

目 次

1、挨拶・祝辞

石川県書写書道教育連盟会長 第7回石川県書写書道教育大会長	藤 則 雄 -----	1
石川県教育委員会教育長	寺 西 盛 雄 -----	2
金沢市教育委員会教育長	石 原 多 賀 子 -----	3

2、第7回石川県書写書道教育研究大会要項 ----- 4

3、公開授業学習指導案

金沢市立弥生小学校 教諭	石 野 昌 子 -----	6
石川県立金沢中央高等学校 教諭	久 田 英 夫 -----	8

4、研究発表

金沢市立高尾台中学校 教諭	山 浦 知 巳 -----	13
---------------	---------------	----

5、研究誌上発表

石川県立平和町養護学校	細 川 恵 子 -----	17
七尾市立小丸山小学校 教諭	田 中 伸 一 -----	27
加賀市立東和中学校学校 教諭	小座間 美智子 -----	33
石川県立輪島実業高等学校 講師	木 下 信 子 -----	37

6、石川県書写書道教育連盟のあゆみ ----- 47

7、平成8年度石川県書写書道教育連盟役員一覧 ----- 51

8、第7回石川県書写書道教育研究大会役員一覧 ----- 53

9、石川県書写書道教育連盟規約 ----- 54



ご 挨拶

石川県書写書道教育連盟会長
第7回石川県書写書道教育研究大会長
藤 貝 友 佳

このたび、石川県の諸学校で、書写書道教育にたずさわっておられます教育者・研究者のご参加をえて、第7回石川県書写書道教育研究大会を、金沢市立弥生小学校と県立金沢中央高等学校を主会場として開催することになりましたことは、誠に喜ばしいことであり、研究のご発表をされます方々やご参加下さいました各位とともに、心からの慶びを申し上げたく存じます。

さて、幼稚園から大学に至るまでの、各校園・大学を、書写書道教育の一貫性・有機的連携性という目的のもと、全国にその例を見ない連盟化をなし遂げ、今年に至るまでの約7年有余の間、書写書道教育の発展のために努力され、本連盟会員相互の切磋琢磨と親睦のために心を盡くしてこられたところであります。その成果は徐々にではありますが、次第に評価を受けつつあるところであります。

また、当初、本研究大会の開催地をローテーション方式とし、特定の人々と地域に遍在しての活動を極力避け、更なる将来への発展を期して、輪番方式を目途としてきたところでありましたが、平成7年度の第6回大会で、初志を貫徹することができ、一サイクルを終え、愈々、第2ラウンドを迎えることができました。それは本連盟の会員のご理解とご協力の賜物であり、本連盟の力量の漸進の証であるともいえましょう。

第7回研究大会のために、ご遠路遙るばると、講演のためにわざわざご来沢頂きました講師の、静岡大学教授 平形精一先生のご好意に、連盟会員一同を代表して心からの感謝の意を表する次第であります。また、本大会を目指して、今日に至るまで研究発表のために研鑽してこられました石野昌子先生と久田英夫先生に、さらに、本大会を成功裡に導くべく会場の設営等にご協力とご盡力を賜った弥生小学校の沢田和子校長・教職員各位と中央高等学校の中川泰邦校長・教職員各位、及び本連盟研究大会実行委員の各位に、心からの敬意と感謝の意を表したいと存じます。また、石川県下の各地より、本大会参加のために遠路からご出席下さった先生方にも、その熱意に対して、敬意を表したいと思います。

最後になりましたが、石川県書写書道教育連盟が、会員各位の不断のご努力とご協力によって、今後ますます発展し、会員各位には、ご健勝にて研究・教育に益々ご精進下さることを心から祈念しまして、第7回研究大会に当たってのご挨拶と致します。

祝 辞



石川県教育委員会教育長
寺 西 盛 雄

第7回石川県書写書道教育研究大会が盛大に開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。また、石川県書写書道教育連盟が、本大会の開催を加賀地区・能登地区にまで展開させ、県内の書写書道教育の充実・発展のために多大な貢献をされておりますことに、深く敬意を表するものであります。

21世紀まで後わずかとなった今、家庭や地域社会の変容、科学技術の発展、各種情報機器の普及、価値観の多様化、国際化の進展等変化がますます激しくなる社会の中で、児童生徒の多様な輝く感性や個性を引き出し、伸ばさせていかなければならないと思っております。

去る7月の第15期中央教育審議会第一次答申では、これからの教育は、「ゆとり」の中で、子供たちに「生きる力」を育成することが必要であると指摘しております。すなわち、その力には、課題発見からよりよい解決にいたるまでの主体的学習能力、並びに豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力という要素が考えられます。これらの要素は、ある一時期に養われるものではなく、幼少期からの長い年月を通じて培われるものであります。

幸い本県においては、幼稚園から大学までの6校種が連携した石川県書写書道教育連盟の熱心な活動により、子供たちの長い成長過程を広く見据え、授業実践を行っていると思っております。本年度の公開授業は、「書きたい意欲を持たせるために」というサブテーマのもと、小学校では字源にまでさかのぼった筆順指導が、また高等学校ではさまざまな字体を自由に用いての漢字仮名交じり文の指導が予定されているということですが、基礎基本から、多様な表現方法にいたるまでの、子供たちの発達段階に即した指導と評価の在り方について、大きな示唆がえられることと思われま

す。申すまでもなく、わが国は「言霊の幸ふ国」とされ、ことばや「文字」に畏れを抱き、大切に扱ってきました。一語一語に意を注ぎ、一点一画に心を刻みながら、日本の文化を支える美しいことばや文字を磨き上げてきました。今日、情報機器の発達や国際化の進展が著しい時代であればこそ、かえって、ことばを自らの手で描き表現することにより、日本の文化の原点に立ち返り、新しい時代を心豊かに生きる契機を得られるものと思われま

す。21世紀を目前に控え、今後ますます書写書道教育が重みを増し、本連盟に対する期待も高くなっております。

最後になりましたが、大会関係者のご労苦に深く敬意を表するとともに、本大会の成功と連盟の一層の発展を祈念し、祝辞といたします。

祝 辞



金沢市教育委員会教育長
石原 多賀子

第7回石川県書写書道教育研究大会の開催を、心よりお祝い申し上げます。

21世紀に向けて、これからの学校教育は、こどもたち自らの「生きる力」の育成を基本として、知・徳・体のバランスのとれた教育を展開し、豊かな人間性をはぐくむことをめざしているといえます。

また、国際化の進展のなかで、従来にもまして、日本の言語や伝統、文化を大切にすることを培うとともに、それらを現代に生かすようにすることも大切となっています。

しかし、ワープロや通信手段の発達した現代においては、文字を美しく丁寧に書く機会は、ますます少なくなってきました。そうしたおり、本連盟が、「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」という大会テーマのもと、子どもたちの書く意欲を大切にしながら、研究実践を積み重ねてこられたことは、今日的課題に対応したまことに意義あるものといえましょう。言語の文字としての機能性を重視し、文字感覚の育成と、書写の能力を生活に役立てる態度を育てることをめざして、着実な実践が引き続き展開されることを心から願わずにはおれません。

今回の大会におきましても、日頃の実践を交流しあい、共に高め合っていく研究会として、有意義な議論が交わされ、多くの成果を上げられることを期待しています。

最後に、本研究会の開催のための準備にあられた関係者の方々、また、研究授業や研究発表のために実践を積んでこられた各先生方に、心から敬意を表します。書写書道教育の大切さが叫ばれている今日、石川県書写書道教育連盟が、今後ますます充実、発展され、時代の要請にこたえた研究、実践を行っていかれることをお祈りして、お祝いの言葉いたします。

第7回 石川県書写書道教育研究大会

1. 研究大会テーマ

「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」
 書きたい意欲を持たせるために

2. 会場 石川県立金沢中央高等学校・金沢市立弥生小学校

3. 期日 平成 8年 11月 21日 (木)

4. 主催 石川県書写書道教育連盟

5. 後援 石川県教育委員会・金沢市教育委員会・石川県私立幼稚園協会

6. 記念講演 演題 「意欲を高めるための書写書道教育」

講師 平形 精一 先生

: 静岡大学教授: 全日本書写書道教育研究会常任理事

: 全国大学書写書道教育学会理事

7. 日程

10:00	10:30	11:20	12:20	13:20	:40	14:25	:40	15:10	16:30
受付	公開授業 (金沢中央高校)	研究発表・研究協議	遊・働	附	公開授業 (弥生小学校)	研究協議	全体会 記念講演		

8. 公開授業 高等学校(10:30~11:15)

校種	学年	単元名	授業者
高校(靴釦)	2年	漢字仮名交じりの書	久田 英夫 教諭(県立金沢中央高校)

9. 研究発表 中学校 (11:30~11:50)

校種	弊	内 容	発 表 者
中学校	3弊	漢字学習時における書写指導	山浦 知巳 教諭(釧粒高尾台中学校)

10. 研究協議会Ⅰ (中学校・高等学校) (11:50~12:20)

	助 言 者	司 会 者	記 録 者
研究協議会Ⅰ (公開授業) (研究発表)	石川県教育委員会指導主事 表 純 一 金沢市立犀生中学校長 松 田 正 雄	石川県立金沢泉丘高等学校教諭 中 山 武 久	石川県立金沢向陽高等学校講師 佐竹真知子 石川県立金沢桜丘高等学校講師 出坂優美子

11. 公開授業 小学校(13:40~14:25)

校種	弊	単 元 名	授 業 者
小学校	4	筆順(左払いと横画)「左右」	石野昌子教諭(金沢市立弥生小学校)

12. 研究協議会Ⅱ (14:40~15:10)

	助 言 者	司 会 者	記 録 者
研究協議会Ⅱ (公開授業)	石川県教育委員会指導主事 帽子山瑞枝 七尾市立小丸山小学校長 永井志津子	金沢市立花園小学校教諭 大 浦 努	加賀市立作見小学校教諭 村 井 和 枝 内灘町立大根布小学校教諭 坂 井 雪 絵

13. 全体会(15:10~16:30) 司会 林 昭悦 (石川県立津幡高等学校教諭)

- ・挨拶 石川県書写書道教育連盟会長
- ・祝辞 石川県教育委員会教育長・金沢市教育委員会教育長

- ・記念講演 演題 「意欲を高めるための書写書道教育」

講師 平形 精 一 先生

: 静岡大学教授: 全日本書写書道教育研究会常任理事
: 全国大学書写書道教育学会理事

児童 金沢市立弥生小学校 4年3組

児童数29名

指導者 教諭 石野昌子

1. 単元名 筆順（左払いと横画） 「左右」
2. 目標
 - ・文字の作られ方や、筆順により字形が変化していることに興味・関心をもち、筆順に注意して書くことができる
 - ・自分の課題を見つけ、進んで学習することができる
 - ・毛筆の学習を生かして、硬筆で正しく書くことができる
3. 指導にあたって

筆順については、低学年から硬筆によってひと通り学んできている。が、中学年になると、学習内容の増加に伴い文字の使用量が増加し、書く速度が要求されたり、文字への馴れ、ギャングエイジという時期も手伝い、文字を整えて書こうとする意識が薄れ、雑に書く傾向がますます強くなって、ともすると、筆順もそのときどきでいい加減に書く児童が現われてくる。そのため、似たようなものはみな同じように書いたりして文字による筆順の違いなど安易に見過ごし勝ちになる。

そこで、「左」と「右」の筆順について調べたところ、「左」の正答率は80%で、「右」は26%であった。まして、「左」と「右」の横画の長さで「右」が長くなっている児童はほんのわずかであった。このような実態からしても毛筆で、少ない字数をもとに、筆順と筆順による字形の変化を明確におさえた学習をすることは大変意義あることと思う。教材の「左右」を学習することによって、筆順と字形の関係が理解できれば、今後の言語事項に関する学習や日常生活における文字意識もより高まるであろう。

4年の4月に会った子どもたちの硬筆の文字を見ると、文字を整えて書くという意識には、個人差があり、多くのことを一生懸命書くため、文字が非常に乱雑になる児童も見られた。また、毛筆の文字は丁寧に書くが、硬筆の文字は、乱雑になっていたりと、別のものとしてとらえている児童もいた。4月当初から見ると、落ち着き、集中力はついてきたが、準備や後始末に時間がかかる児童もいる。また、正しく書けない児童には、姿勢や筆の持ち方に問題のある場合が多く、その都度、指導をくり返してきた。始筆や終筆がうまく書けない児童もいるが、文字意識は高まりつつある。

本単元は、「左」と「右」の筆順や字形の違いに気づかせ、1限目は、「左」を中心に、2限目は、「右」を中心に学習を進めたい。が、児童の意識の中では、「左」と「右」を比較した学習をさせたいと考えている。また、練習過程では、段階に応じた練習用紙を用意し、各自の課題にあったものを選択して練習できるようにさせたい。最後には上達を認め合い、学習の成果の喜びを味わわせたい。

4. 指導計画 (総時数 3時間)

- 第一次 筆順や字形に注意して「左」を書く……………1時
- 第二次 筆順や字形に注意して「右」を書く……………1時 (本時)
- 第三次 「左右」を清書し、硬筆練習をする……………1時

5. 本時の学習

- (1) ねらい・「左」と「右」の字形や筆順の違いに気づき「右」を正しく書くことができる
 - ・自分の課題を見つけ、進んで学習することができる
- (2) 学習の展開

学習活動	時	児童の思考の流れ	教師の支援
1. 本時のめあてをつかむ	3'	「左」筆順 1画目は横画、2画目は払い 字形 1画目は短く、2画目は長い 下広がり三角形のような形 筆順と字形は関係あるよ	・前時の学習「左」の字形や筆順を想起させ「右」は「左」と同じ書き方でよいか意識化する
2 「右」の試書をし、話し合う	10'	「右」はどうか? く「右」を正しく書けるようにしよう ○手本と試書を比べてみよう 字形はちがうよ、筆順はどうか?	・姿勢、筆の持ち方に気をつけるように働きかける ・例のような試書を取り上げ基準に気づくように働きかける
基準を知り自分のめあてをもつ	10'	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>右</p> <p>2画目 短い</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>右</p> <p>1画目 長い</p> </div> </div>	・「左」「右」と書いたものを提示し比較しやすくする、また、外形枠やTPシート、象形文字分解文字等を提示し理解を助けたい
3. 練習をし、批正をする	12'	筆順は1画目は払い、2画目が横画 1画目払いは短く、2画目横画は長い 逆三角形に似た形 ○基準にそって自己批正しよう 1画目は短く、2画目は長く、筆順も反対 ○自分のめあてにあった練習をしよう どの用紙を使おうかな ○半紙練習をして、批正しよう(相互)	・基準にそった自己批正ができるよう助言する ・各自のねらいを確認するように働きかける ・必要に応じて示範する
4. まとめ書きをする	5'	○「右」を練習の成果が表れるように書こう ○硬筆で書こう	・ふり返しカードに硬筆練習する欄を設ける
5. 本時のふり返しと次時のめあてをつかむ	5'	○よくなったところを出し合おう 筆順と字形のことがよくわかったよ こんなに変わったよ 上手になったね 今度は「左右」の清書をしたいな これからのノート等にも生かしていきたいな	・互いの上達を認め合い文字を書く楽しみを味わわせたい
(後片付け)			※評価 自分のめあてが達成し、硬筆にも生かすことができたか

生徒 石川県立金沢中央高等学校昼間部(定制/靴制)
2年次(211H/212H/232H) 17名

指導者 教諭 久田英夫

一、単元名 書道Ⅰ 漢字仮名交じりの書(楷書 仮名遣 高校書道Ⅰ)

二、単元設定の理由

「漢字仮名交じりの書」とは、言うまでもなく、漢字仮名交じりの表記による詩歌や文章・語句などを題材として書かれた書という意味であるが、漢字と仮名との表記によるものであるから、当然、日常的な書き物をも含んでいるのである。つまり、「用」と「美」と言うことができるのである。したがって、書写と書道の一貫性を図るうえで、また、硬筆と毛筆を有機的に関連づける上でも、非常に深い意義をもつ分野である。

本単元はこれらのことを踏まえて、中学校国語科書写で学習した「楷書・行書とそれに調和した仮名の書き方」を基礎とし、これに、これまでの高等学校芸術科書道学習によって養った漢字の楷書や行書・平仮名・変体仮名の表現力を融合発展させて、漢字仮名交じりの書の、芸術的表現力の追求と、日常的書写力の向上を図るために設定した。

三、単元の目標

本単元は「漢字の書」「仮名の書」とともに等しく扱われ、学習されるべき大切な一分野であるが、「漢字の書」「仮名の書」と、学習方法において、その性質を大きく異にする点がある。それは、「漢字の書」「仮名の書」が、古名跡を研究することにより、伝統的な表現の理法や技術を身につける、いわゆる臨書という学習方法を取るのに対し、「漢字仮名交じりの書」では「漢字仮名交じりの書」としての古名跡がほとんど見当たらないため、他の分野で行われるような臨書ができないことである。しかし、分野に依らず、書の学習は、古名跡をさまざまに工夫しながら研究することで、漢字と仮名の調和を図り、硬筆と毛筆の関連づけを行う学習がよい方法と考える。

漢字と仮名の調和を図る際に、大まかに言って、漢字の表現に仮名を近づけて書くか、仮名の表現に漢字を近づけて書くか、漢字と仮名それぞれの表現を歩み寄らせて書くかという方法である。これらの方法を実際に体験させ習得させることが、この単元のねらいである。

- 1) 表現を意図的に工夫させ、これまで日常の書写では経験したことのない方法で書かせることにより、漢字の書、仮名の書とは異なった、漢字仮名交じりの書の表現としてのおもしろさ、楽しさを体験させる。
- 2) 現代に密着した漢字仮名交じりの語句や詩文を素材として創作させることにより、書をもっとも身近な表現としてとらえさせ、創意工夫して、作品を作り上げる喜びを体験させる。

四、指導計画

第1段階 漢字の書（仮名の書）の各単元毎に、学習した漢字（仮名）を使って仮名（漢字）と組み合わせた語句を与えて、漢字と仮名（仮名と漢字）の調和を試みさせてきた。

第2段階 指定された漢字（仮名）を使って仮名（漢字）と組み合わせた言葉を各自考え、漢字と仮名（仮名と漢字）を調和させながら書かせる。（2時間配当／本時はその1時間目）

第3段階 指定された語句を書かせる。（2時間配当）

第4段階 各自自由な語句を書かせる。（1時間配当）

第5段階 各自自由な発想、表現方法で書かせる。（1時間配当）

五、本時の学習指導

- 1) 教 材 古典から集字した「雲」「風」
- 2) 内 容 教材から各自一つを選択させる。選択した漢字を使って仮名と組み合わせた語句を各自考えさせ、漢字と仮名を調和させながら書かせる。
- 3) 具体的目標
 - a、漢字と調和させるために漢字の線質を仮名に応用する。
 - b、漢字と調和させるために運筆を統一する。
 - c、漢字と調和させるために質感（墨量）を統一する。
 - d、表現したい言葉を大事にする。
- 4) 留 意 点 本校は単位制を取り入れた（昼間部）定時制の高等学校である。生

徒については、中学校では不登校であったり、全日制高等学校からの転編入生であったり、学力においても多種多様であって、理解力とか表現力などにおいても非常に個人差がある。したがって、生徒一人一人に対応した指導助言がなされなければならない。できるだけ指導者側から頻繁に分かりやすく指導助言をし、生徒自らが作品を完成せて行く過程が自覚できて、制作を楽しめるように配慮する。

5) 指導過程

	指 導 内 容	留 意 点
導 入 (5分)	<p>本時の内容と目標を伝達する。</p> <p>各自選択した漢字を半紙に書かせ、前にもって来させる。添削をして、語句を確認する。</p>	<p>本時に各自がすることと目標を自覚させる。</p> <p>選択した漢字の特徴を確認させ、紙面への語句の布置を指導する。</p>
展 開 (30分)	<p>半切1/4の用紙に試し書きさせる。机間巡視し助言する。(以後半切1/4の用紙に書かせる。)</p> <p>助言に基づいて2、3枚練習したものを前にもって来させる。必要に応じて朱墨で添削する。</p> <p>机間巡視し、2、3名の生徒の作品を前に掲示する。よい点を見つけほめる。</p> <p>必要に応じて、生徒に作品を前にもって来させて、朱墨で添削する。</p> <p>各自、完成度の高いと思う作品を前にもって来させて、最終の助言をする。</p>	<p>助言は、語句の布置と、目標 a ~ d のうち、1つ位に留める。</p> <p>目標の a ~ d 全般にわたって助言する。</p> <p>本人のみならず他生徒にも意欲を持たせられるようにする。</p> <p>進度の遅い生徒には、参考になるように、本人のねらいに合わせて制作例を示してやる。</p> <p>その作品には印をしておいて、後で清書の作品と比較する。</p>
ま と め (10分)	<p>目標に沿っていると考える2点を提出させ、黒板に掲示する。本人と他生徒の意見を聞いて、内1点を選別する。</p>	<p>無理に意見を求める事なく、時には、本人が納得するように選別のリードをする。</p>

- 6) 評 価
- a) 本時の目標に近づいているか。
 - b) 初期の作品と比較して進歩が見られたか。
 - c) 取り組む態度が熱心であったか。

「漢字仮名交じりの書」資料

雲
説文 篆文

云
説文 古文

風
八大山人

風
蘇軾

風
趙之謙

風
枯樹賦

雲
清 吳讓之

雲
曹全碑

風
清 人

風
野風士代

風
黃庭堅

雲
楊大眼造像記
北魏

雲
麻姑仙壇記
唐 顏真卿

風
王羲之

風
王 鐸

風
風日帖

雲
枯樹賦
唐 褚遂良

雲
宋 米芾

雲

雲

池
大雅

風

雲
書譜
唐 孫過庭

雲
傅 山

雲
何紹基

雲
十七帖
東晉 王羲之

雲
懷 素

雲
懷 素

雲
空海

雲

云

云

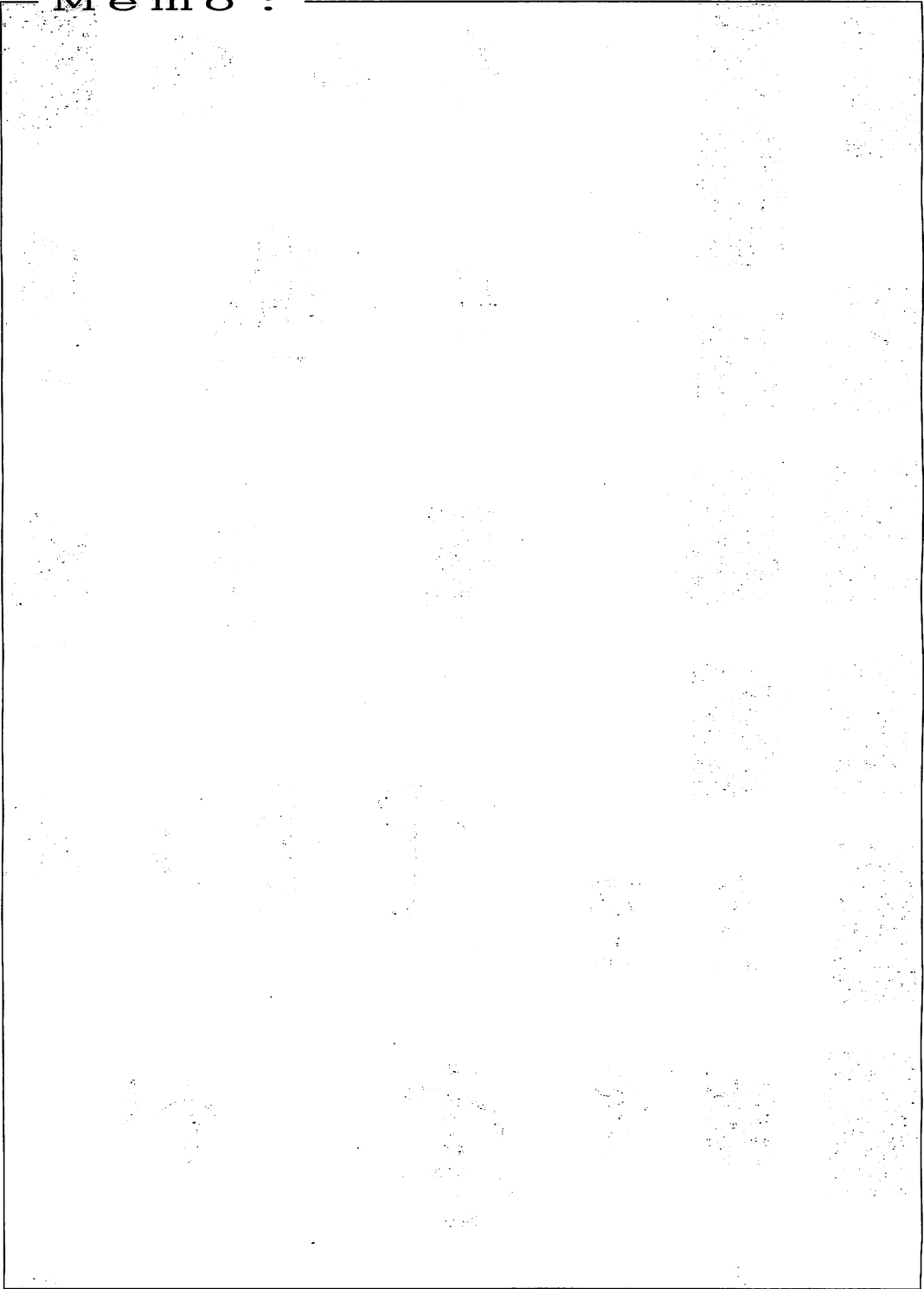
云

雲
貴 覽

風 風

風

Memo :



研 究 発 表

漢字学習時における書写指導

金沢市立高尾台中学校 教諭 山浦 知巳
(共同研究 金沢市立浅野川中学校 教諭 八田 和幸)

1. はじめに

本研究は、丁寧に文字を書く姿勢、行書に親しむ態度という書写的目標を、短かい時間を利用して、中学3年生とい受験を目の前にしている生徒の国語の時間の中に、いかに継続的・効果的に組み込んでゆくか。それを課題として始めた。

ご存じのように、指導要領によれば、中学3年生においても書写の時間を年間15～20単位時間指導しなければならないことになっている。これは単純に平均すれば、2週間（国語の授業は7～8単位時間あることになる）の内の1単位時間を書写に振り当てねばならない勘定となる。しかし旧来の硯や大筆、いわゆる習字道具セットを準備しての大きな書道的授業を2週間に1回の割合で断続的に指導することはなかなか難しい。たいがいの中学3年生国語を担当している方は、年末の書き初め指導を集中的に行うことによってそれで書写の時間を割り当てたことにしているように見受けられる。ある程度集中的に指導を行うことは必要であり効果があると思うが、それだけでは物足りない。そこで、授業開始5分間の漢字練習の時間を書写的にも扱うことによって継続的指導を行う試みをしてみた。言い方を変えれば、従来の書写が一つの漢字を精習して得た原理原則をその他の漢字にも応用して美しく整った文字を書く演繹的な手法だとすれば、毎回毎回の漢字練習の中から美しく整った文字を書こうとする帰納的方法の一提案である。

ねらいとしては、①小学校以来言い続けているとめ、はね、はらいを丁寧に書かせること、そのていねいさ自体が文字を美しく書くことにつながる。また②学習する新出漢字の行書体を示すことによって、行書に親しみ慣れる機会を増やし行書学習に役立てること。③新出漢字を覚えること自体に役立つこと。④筆記具の違いにより漢字を覚える定着度を効果的に進めること。以上の4点をめあてに漢字学習プリント（資料1）を作成して授業に臨んだ。

2. プリント作成に当たって配慮したこと

- ①教科書体活字を手本とする形を取ったこと（教科書の新出漢字の欄を2倍×2倍の4倍に拡大コピーするとちょうどこの大きさとなる。）
- ②国語の授業進度に合わせて新出漢字を練習するスタイルをとったこと
- ③行書体も参考として載せたこと（来年度の書写の教科書の見開きに小学校《一年生用教科書》・中学校《二、三年生用教科書》で習う漢字の行書体が載せられている。）
- ④適度な時間でおさまるような文字数・練習量であること。（あまりたくさんは出来な

3. 調査・研究の方法と結果

このプリントを使用した結果、効果があったのかなかったのか、また筆記具の違いによって定着率が違ってくるのかどうか、予備テストとプリント練習を始めて一カ月後にそれぞれ予告なしで漢字テスト（20題、それぞれ、学習してから約2週間ほど経っている漢字を中心に）を行ってみた。ただし、筆ペンを使ったグループは、最初A4版、途中からの改良版ではB4版の拡大サイズのプリントで行った。はね、右払い、左払いについては漢字が正解したものの中から数値である。サンプル数は高尾台中学校3年生4クラス（内筆ペングループは1クラス）、浅野川中学校3年生4クラス（内筆ペングループは1クラス）である。

（予備テスト）

	漢字正答率 (%)	はねの 定着率	右払い 〃	左払い 〃
鉛筆、シャーペン	58.6	55.3	32.5	40.3

（確認テスト）

	漢字正答率 (%)	はねの 定着率	右払い 〃	左払い 〃
鉛筆、シャーペン	64.0	72.0	45.1	45.6
筆ペン	68.2	69.9	56.9	52.8

この結果から、漢字学習においても、丁寧に文字を書くという点においても多少の効果があったと思われる。ただそれが純粋にこのプリントの効果なのか、ものめずらしいことをしたこと自体による効果なのか、また、それぞれの漢字テストの難易度の差もあったかもしれないことを考えに入れておかねばならない。また平均値を出すという方法もやや難点があった。とめ、はね、はらいをきちんと書く生徒は最初からきちんと書けていたし、無頓着な生徒は無頓着なままで、プリントをしたぐらいではあまり変わらなかった。（おそらくシャーペン、鉛筆の持ち方がすでに堅く固定して握っていて、今更多少意識したぐらいでは払いがうまくできないのであろう）平均であがったのは練習したからというよりも、とめ、はね、はらいを意識させたから、といった感じであった。平均値を出すよりも、個別に指導する生徒を見つける資料にとどめておけばよいと思う

4. 生徒の反応

調査結果とは別に生徒の反応や声も記しておく。調査では行書の習得率は調べず、付録扱いにしたが、行書練習のほう为好評で、熱心に取り組んでいた。生徒の興味は、それぞれの漢字を（特に自分の名前を中心に）美しく行書で書くにはどう書けばいいのか知りたいようであった。行書の特徴は丸みと連続と……と知識で理解して、一字二字の漢字の行書を何回も練習しても、実際、練習したのとは別の目の前の漢字をどのくらいまで崩すとかっこよくなおかつ速くかけるのかというイメージは湧いてこない。それをいろいろな字において、それぞれ行書で書いてあるのだから、行書のイメージを捉えやすいようであった。逆に言えば、丁寧に書けとは言っても、いまさら楷書のため・はねなんてという思いもあるようである。きちんとできる生徒はすでにきちんと書いているし、無頓着な生徒は相変わらず無頓着なままであった。

5. これからの課題と反省

このプリントによる学習は国語や書写の授業のおもしろさや妙味とはやや離れたところにあるかもしれない。効果の有無や効率、作業的側面、受験に結びつくか否かという功利的な面ばかり強調した。一学期に1～2回ぐらいの割合でも毛筆大字の書写の授業を集中して美しい文字について意識を高める指導も併用してゆきたい。

また、プリント作業中も（読み易さへの配慮もかねて）書き易さを追求する姿勢についても話をしてゆきたい。同じシャープペンシルを使うにしてもHやFの芯を使うよりは、Bや2Bのやわらかな芯でなめらかに書いたり、シャープペンシルより鉛筆を使うとか、どう鉛筆を持てば。きれいに、楽に、疲れ少なく文字が書けるのか、などなど。

今回はお手本にした教科書体活字も例えばコンピューターを使って、楷書なら九成宮や孔子廟堂碑、行書なら蘭亭序か集王聖教序の文字をぱっと出てくるようになると鑑賞力や文字に対する美意識も育てられような気がする。

研 究 紙 上 発 表

重度障害児の文字書きを高める指導

石川県立平和町養護学校 細川 恵子

1. 本校の概要と文字書きの動機について

・平和町養護学校の概要

本校は、石川整肢学園（病院）の隣接校である。小学部80人、中学部34人は整肢学園へ措置入園で通園しながら、廊下を通じて本校へ登校している。

肢体機能に障害を持つ中で脳性まひが多く、全校児童生徒114人のうち脳性まひが、約半数を占めている状態である。その他に二分背椎、ペルテス病、筋ジストロフィー症等あげられるが、脳性疾患を併せ持つ児童生徒も19人と多い。

中学部卒業後の進路については、県立養護、愛育養護、瀬戸養護等の高等部へ進学する生徒がほとんどでその他の生徒は、作業所や授産所へ進む。

2. 文字書きの動機とレディネス学習の取り組みについて（騎 躰器a-c なぞりまて鑑）

本児は、脳性まひ（アテトーゼ型）による四肢機能の著しい障害にてんかん発作を併せ持ち、全面介助が必要である。自発言語もわずかで教師とのコミュニケーションもなかなか難しい。しかし、読字能力や意欲は人一倍あるので、それを生かし、なぞり書きや文字書きができるかもしれないと考えた。脳性まひ特有の不随意運動もあるが、教材の工夫と反復練習によってなぞり書きや文字書きの習得が可能であると考え指導にあたった。この学習の導入として、運筆練習器を使いなぞり書きを行った。それは、カーテンレールに持ち手（グリップ写真）のついたものを使用し ア. 横引き イ. 斜め引き ウ. 縦引きの手順で行った。その際、利き手に重りをつけ不随意運動の抑制や、使用するあらゆる教具について固定し練習させた。また、直線だけでなく曲線のなぞり書きも行い、かな文字のなぞり書きにつなげたいと考えた。

3. かな文字・カタカナのなぞり書き（騎 ベに板d・e・g なぞり板の土鑑）

かな文字のなぞり書きとして、ベニヤをくり貫いたなぞり板を使用した。まず簡単なかな文字の溝を1.5cmにした「し、う、つ、て、く」をなぞらせてみた。B5の用紙1枚の大きさに鉛筆で書かせてみたが、最初は、力が入り過ぎてしんがすぐ折れてしまった。力の入れ具合が難しい。そこで太い水性のマジックを使用してみた。しかし、マジックを持って書こうとしてもスプーンを持つ手のようになるため、思うように文字がなぞれなかった。そこで、持ち方を変えて（鉛筆の持ち方の変遷 資料参照）練習を重ねた結果「し、う、つ、て、く」等がなぞれるようになった。しかし、曲が

りのある文字のなぞりは緊張が強くコントロールが困難なためにベニヤ板では、マジックで書くとその色がつきやすくなり、また見た目にも汚れが目立ち、よだれも出るので洋服や顔に色がつきやすくなるのである。その点アクリル板だとふけば落ちるので何度でも使え便利であり、使いやすいと考えたのである。そこで、素材をアクリル板にかえベニヤ板と同じ規格の教具を与えてみた。これもはじめのうちは、不随意運動や緊張のためはみ出すことも多かったが、練習を重ねるとうまくなぞれるようになった。

そこで次は、カタカナのアクリル板の溝を今までよりも細くして同じ方法で試みた。これは、太いマジックでなぞり書きがうまくできたので、細いマジックで太さ8mmの文字をなぞらせてみたのである。この指導は、鉛筆書きができることをねらって行ったのである。このようにして、太いマジックから細いマジックそして鉛筆書きへとスモールステップで取り組み、なんとか鉛筆が握れるようになったのである。鉛筆書きの練習を重ねることにより持ち方も上手になり、カタカナ文字もはっきりとなぞれるようになった。

4. カタカナを自力で書く(馴 『ハ』①~③鑑)

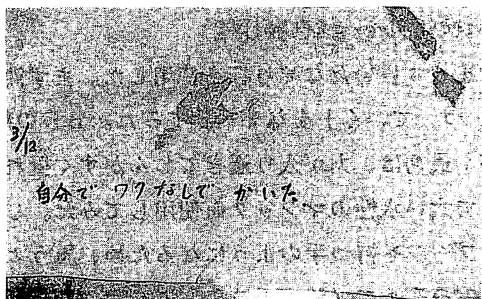
(ア) B5版の教具を使って

腕に不随意運動があるため紙が動き、思うように書けない。そこで、B5の落書き帳が入る箱をつくり裏には滑り止めをつけ自力で書く練習を行った。

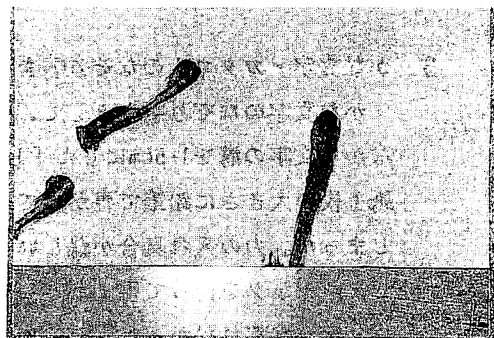
座椅子のベルト止めの角に肘をつけ腕を固定させ、右手で左腕を押さえ、手の力が弱いためその上から先生が手を押さえて書かせた。しかし、腕に不随意運動があり、なかなか思うように書けない。そこで、手を押さえる位置を手首にかえて試みた。(先生が手を添える)この位置で固定すると、文字を意識してマジックで「ハ」(馴 鑑①~③)を自力で書いた。



(写真①)



(写真②)

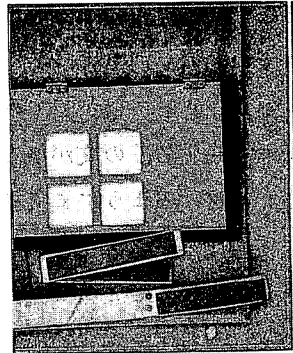


(写真③)

(イ) 教具の改良を行う (写真④参照)

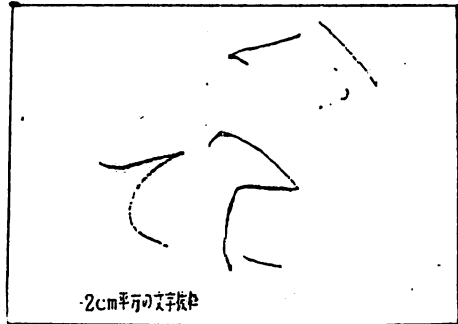
今度は、用紙を固定しなくてもよい方法として、アクリル板5cmの教具のます目縦横2列の教具を用いてみた。これは、

「いし」「うし」「くし」などの簡単な文字を縦横どちらからでも書けるように工夫した。それは、教具の下に紙を載せ上から押さえ、腕から手首までを座板と自助具に密着させ、文字を書く方法である。しかし、コントロールが難しいのでベルトをした腕に先生の手を添え(緊張による反動を防ぐ)介助



(写真④ ます目縦横二列の教具参照) して書かせて見ることにした。この方法でもカタカナと同様自分で文字の形に持って行くことができ、5cmよりも小さい文字が書けることを教えた。

練習を繰り返すことにより、5cmの枠の中に2cm平方の文字『て』を書いた。『て』を書いたの?と尋ねると嬉しそうに微笑んで「はい」と返事がかえった。



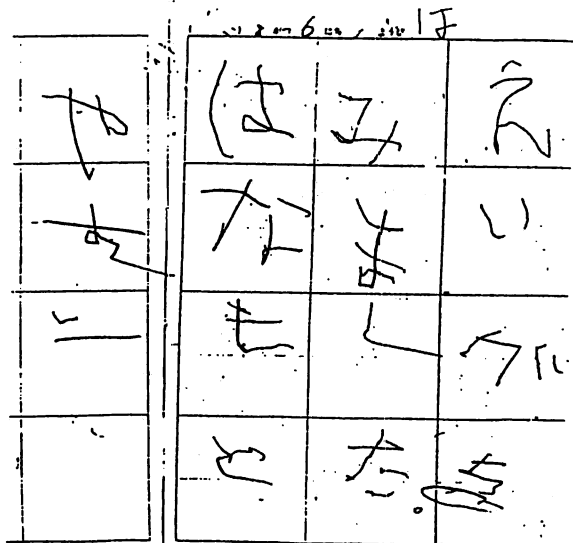
まさか「て」が書けるとは思わず、我が目を疑った。それも5cmならいざしらず、2cmの大きさの文字を自力で書くことができたことは思いもよらないことであった。

(⑤ 5cmの枠を使って2cm平方の『ハ』『て』を自力で書いた)

(ウ) 3×6の教具を用いて

2cmの『て』が書けたので、ます目を増やした。しかし、ベルトで腕を固定しないと文字が書けず、隣の枠へはみ出したり、同じ場所を書くことが多かった。

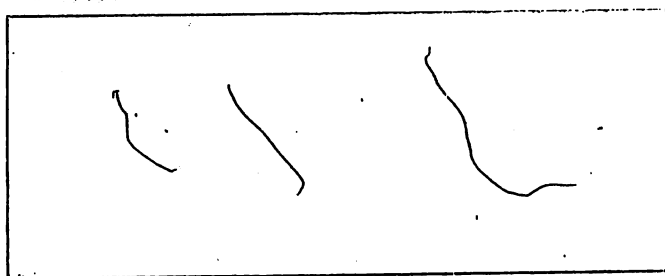
そこで、横2文字書くと次の枠まで手が届かないため、書ける位置まで教具をずらして



(⑥ 教師が腕を持ち振れを防ぎ書いた5cmの文字格小)

くと文字になる率が高いようである。しかし、固定が不安定だと腕の不随意運動が起き、同じ枠内に書いてしまうため、読めない文字になることが多かった。

そこで、本児の右手でベルトをした左手を押さえて文字を書かせてみた。はじめは右手の握力が弱く思うように書けなかった。そこで教師が腕を押さえ振れるのをコントロールして書かせてみた。この方法で練習を重ねると『えいがをみました。はなもとやすこ』の文がなんとかわかるように書けた。その後には、自力で『い』『し』と書けるようにまでなった。

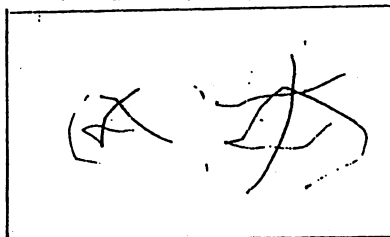


(⑦ 介助で書いた5cmの文字「い」「し」(縮小))

5. 書写

ベルトをつけた状態での文字書きが上手になったので、今度はベルトを外し自分でコントロールすることを覚えさせた。それは、右手で左腕を押さえ文字書きをさせてみたが、はじめのうちは不随意運動と強い緊張のため両腕が伸びきった状態で文字書きどころではなかった。自分で、コントロールができるようになったところで、「は」

と「ハ」、「こ」と「コ」、「す」と「ス」、「な」と「ナ」、「も」と「モ」、「や」と「ヤ」、「あ」と「ア」の中では、名前の文字をカタカナやひらがなで書く練習をした。やはり曲がりのある文字「あ」「す」の丸くする部分は、手首のコントロールが必要であ



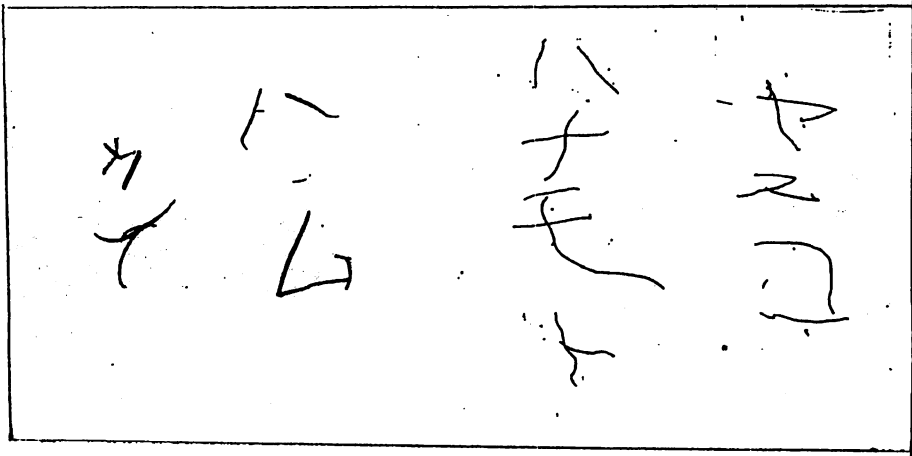
(⑧ 練習で書いた文字「は」「あ」)

った。その動きを反復練習することで難しいながらも「は」「あ」はそれらしく書けるようになってきた。

次に、身近な2文字(ひらがな・カタカナの対応)を行った。

絵カードの「かに」とカタカナの「カニ」ひらがなの「かに」等、絵カードとひらがなやカタカナのマッチングをさせながら、ひらがなやカタカナを書かせてみたがなかなか難しいようだった。見慣れている「ハム」は絵カードを見て自ら書き驚いた。このようにして絵カードと文字練習による書写の練習を平行して進めたが、書くことに関しては、まだまだ練習不足で思うようには書けないようだった。しかし、手の不随意運動を自分でコントロールすることができるようになり、書く要領を身につけたようである。(カイ、ハム書いた) 今後は、自分で書く意欲と努力次第であると考えら

れる。



(㊤ 助で書いた字『カイ』『ハム』『ハナモトヤスコ』5cmの字)

6. まとめ

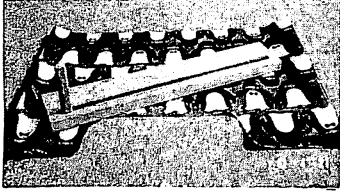
このように文字書きの指導を試みてきたが、書写の指導をする以前にまず大切なことは教師とのコミュニケーションを深め、お互いの信頼関係を築くことであろう。また、障害にもよるが、何かしようとする緊張のため不随意運動がおき、文字を書こうとすると力が入り反発して思うように書けない場合もある。このような時は、児童の実態を正しく把握し、不随意運動を抑制しながら補助具などを使用し、改良することも考える必要がある。

本研究では、書くための教具を暗中模索しながら与え、書くことを定着させるように指導してきた。その結果、これまでではできなかったことでも練習を重ねることのできるようになったことも多く、今後は、文字書きを継続し、集中力を高め書ける文字を更に増やし文につなげたい。そして、文字書きの練習を通してその努力を認め学習意欲を育てたい。さらには漢字にも関心をもたせていきたいと考えている。

※ 資料として

7. レディネス学習の取り組み
- イ. 鉛筆の持ち方の変遷 鉛筆の持ち方参照
- ウ. 曲がりのないなぞり文字

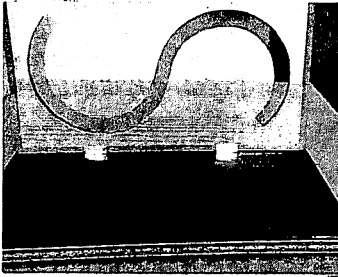
ア. レディネス学習の取り組み



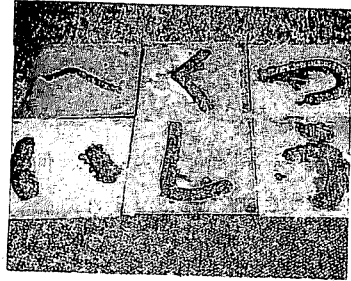
写真a 運筆練習(グリフ用)



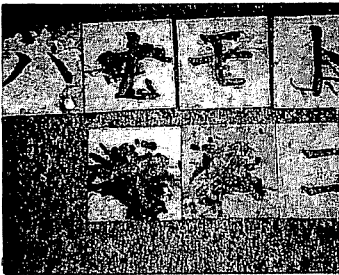
写真b 曲線なぞり「コ」



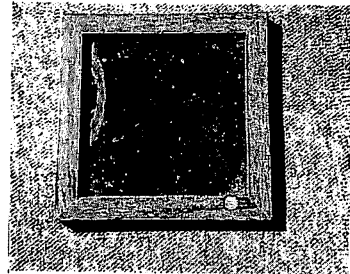
写真c 曲線「∞」



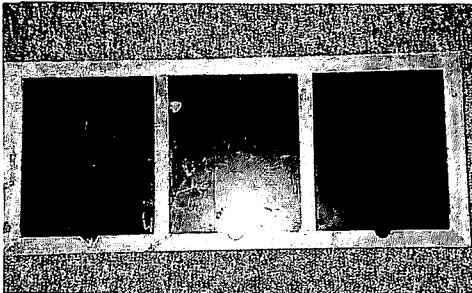
写真d ベニヤなぞり板(ひらがな)



写真e ベニヤなぞり板(カタカナ)



写真f ベニヤ板の土台



写真g アクリル板の土台

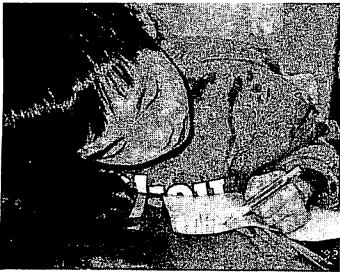
イ. 鉛筆の持ち方の変遷 鉛筆の持ち方参照



① 運筆練習1
スプーンの持ち方



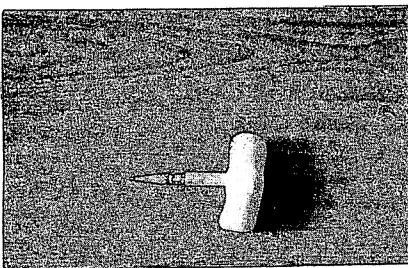
② 運筆練習2
握りこぶし



③ 小さいクリップを使用1



④ 小さいクリップ使用2



⑤ 紙粘土付き鉛筆使用



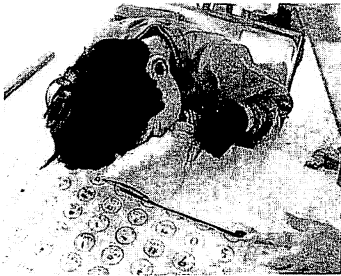
⑥ 大きなクリップを使用



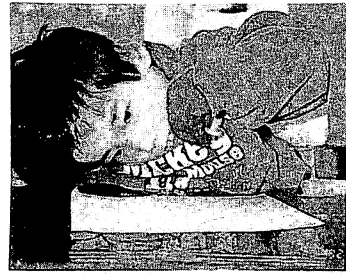
⑦ 紐で止めて使用



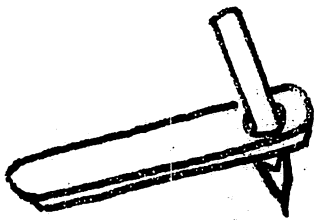
⑧ 手袋とクリップ使用 1



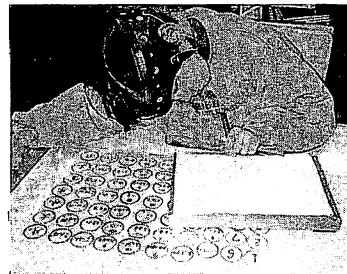
⑨ 手袋とクリップ使用 2



⑩ 手袋とクリップ使用 3
手首を曲げる



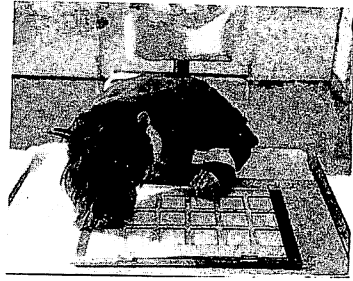
⑪ 板に穴を空けた物



⑫ B5版の教具使用



⑬ 5 cm 枠縦横 2 × 2



⑭ 5 cm 枠縦横 3 × 6 の教具使用

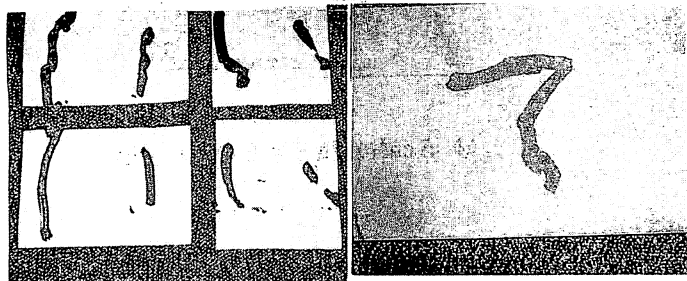
5 cm 枠の教具を用いて書いた文字

ニワトリ
はくし
本
来
はくし
はくし
はくし

実物大
です

はくし (3)

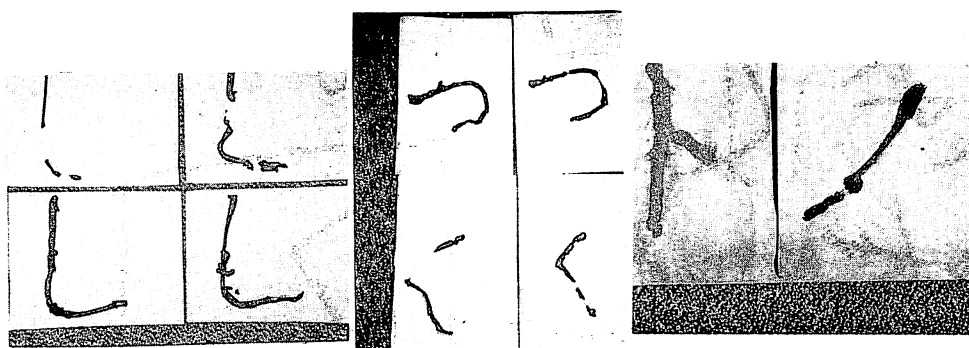
ウ. 曲がりのない文字のなぞり



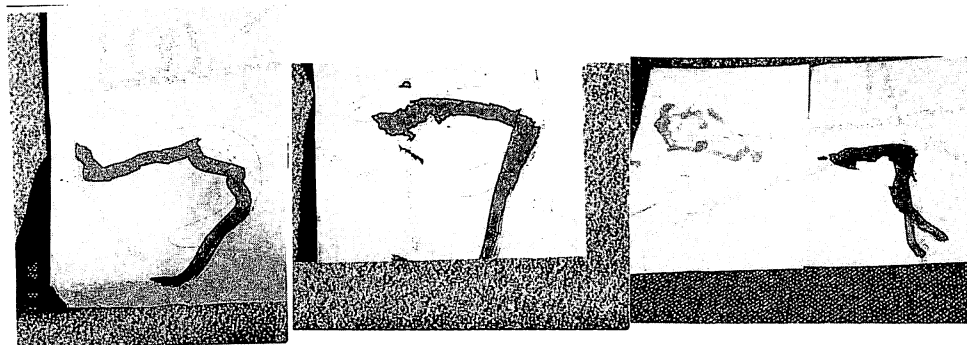
ベニヤ板を使ったなぞり



教具アクリル板を使ったなぞり
スプーンの持ち方



アクリル板を使ったなぞり



腕を持ち振れを防ぎ
なぞった文字

範書用VTRの作成と 有効な活用法の研究

七尾市立小丸山小学校 教諭 田中 伸一

はじめに

書写の授業では、学習する文字の全体や部分を教師が子どもたちの前で書いてみせる「範書」と呼ばれる場面が数回ある。

授業中に行なわれる範書は子どもたちにとっては、さまざまな点で意味があると思われる。教師の直接範書は本時の学習のめあてを目の前に示すことになり、子どもたちにとってまず意欲がわく。また、文字を書き上げるまでの経過とリズムがわかり、自分もあのように書けばよいのだという最も具体的なヒントが得られる。さらに「さあ自分たちも書こう」という雰囲気をつくる効果も考えられる。

しかし、実際の授業で範書を行なおうとすると様々な点で不都合なことがあることに気づく。水黒板の使用では、大筆に含ませる水分量の調節をあやまると水分が垂れてきたりかすれたりする。また古くなった水黒板では文字が明瞭に浮かび上がらなかつたりする。さらに水黒板の性質上繰り返しの使用は困難である。OHPを使用するとなると準備に手間取る。さらに児童の前に書いてみせるとなると過ちは許されないという心理的負担も生じる。

そこでここでは、一般家庭でも普及著しい8ミリビデオカメラを使って、繰り返しの使用が可能であり、児童自身でも簡単に使用できる「範書用VTR」の作成を試み、実際の授業で使用してみることにし、その活用法をさぐることにした。

1. VTRの作成法および映像の種類

VTRに収録する内容は、子どもたちが書写するときと同じ用紙に教師が毛筆で書いている場面である。撮影は、書いている用紙の真上方向から一文字ずつの筆の動きが被写体となるように8ミリビデオカメラ（シャープVL-55）をセットした。（文末写真1）

また、編集したテープには3種類の映像を順番に収録し、「ビデオ1」「ビデオ2」「ビデオ3」と名づけた。いずれも同じ二文字の範書（図1）であるが、「説明ことば」の有る無し、説明ことばの内容のちがいにより種類分けした。なお、説明ことばは、筆者の胸に取り付けられたタイピン式マイクから映像と同時に収録された。

授業で使用するVHSテープには、巻き戻しなどの時間の無駄を省くために、3種類の映像を1セット（約8分間）として5セットを繰り返し収録しておいた（図2）。

図1. 手本



図2. 映像の内容と教師の意図

《映像テープの内容》

《教師の意図・説明ことば》

<p>小丸山小学校 小学四年 書写 文字の中心の点や画に 気をつけて書きましょう。</p>	<p>本時のめあてが数秒間映し出される。 (以下、ビデオ1～3でも、各めあてがはじめに映し出される。) ここでは、毛筆「雨音」を用紙に書くときに注意すべきことを簡潔に表現して示す。</p>
<p>ビデオ1 どんな文字でしょう。 気をつけることを考え ながら見ましょう。</p>	<p>教師の説明を加えないで見る。 ここでは、本時に学習する文字を、これまでの学習事項をふりかえりながら、どんなことに留意すべきかを考えながら見る。児童によって想起される内容は異なると思われる。「よこ画は右上がり」「始筆と終筆はしっかりと押さえて」「よこ画の間隔に気をつけて」などが想起されると思われる。</p>
<p>(映像のみ) 2分04秒 カメラの動き(被写体) 「雨」→「音」→「雨音」 (以下2・3でも同じ)</p>	<p>「『雨音』を書くにあたって最小限必要なことをこれから示しますよ」という願いがあ</p>
<p>ビデオ2 これだけはぜひ！ 大切なポイント</p>	<p>「『雨音』を書くにあたって最小限必要なことをこれから示しますよ」という願いがあ</p>
<p>(映像+ポイント説明) 2分10秒</p>	<p>— 映像中の教師の言葉 — 【雨】「一画目の始筆の位置に注意しましょう」 「(4画目)中心を通ります」「(5～8画目)点の大きさをそろえましょう」 【音】「1画目の点が文字の中心になります」 「(3・4画目)左右対称になるように打ちます」「日が大きくなりすぎないように注意します」</p>
<p>ビデオ3 上手になりたい人のために。 よく見えるポイントは？</p>	<p>「さらによく書きたい人のために少し詳しい説明をしますから参考にしよう」という願いがあ</p>

— 映像中の教師の言葉 —

(映像+やや詳しい説明)

2分55秒

【雨】「(2画目) やや内側に向け、終筆はしっかりと止めます」「(3画目の折れ) しっかりと止め、たて画もやや内側に向けます。はねは、筆を横に動かすようにして静かにはねます」
 「点は斜めから筆をおろすようにします」
 【音】「(2画目) やや右上がりに書きます」「(5画目) やや右上がりに勢いよく書きましょう」
 「(日の) たて画は真下に筆を動かします」

2. 授業での活用

授業中にVTRが活用されそうな場面を4つ考えてみた。

- どんな書き方(文字の形・筆使い)をすればよいかを知るために見る。(導入段階)
- 自分でどう書いたらよいか迷っているときに見る。(展開段階)
- もっとうまく書きたいときに見る。(展開段階)
- 書いた作品を振り返るときに見る。(評価・まとめの段階)

私が書写の授業を担当している学級は2クラスあり、それぞれ異なった活用を試みることにした。すなわち、出張授業を行なっているクラスには「導入段階」で活用し、学級担任をしているクラスには「展開段階」のときに活用することにした。

それぞれの授業の流れは次のとおりである。

指導計画(2時間扱い) (共通)

【第1時】文字の中心に注意して、正しく整えて書くことを知る。(本時)

【第2時】文字の中心、文字の大きさ、文字の形に注意して、正しく書くことを知る。

《導入段階での活用》

ビデオ活用のねらい 全員で一斉に見ることにより、字形の注意・筆使いの方法を確認する。

	学習活動	教師の指示・説明
導 入	学習する文字を知る	教師が水黒板に書く。「どんなことに注意したらよいか考えながら見てください」(解説は加えない)
	学習のめあてを知る	「文字の中心に注意して書く勉強をします」

導 入	空書をする	「概形・筆運び・とめ・はね等に注意しましょう」
	試書を行なう（1枚）	「書いた人は手本と比べてみよう」
	範書ビデオを見る （1回だけ一斉に見せる）	「どんなことに注意をして書いているかよく見ま しょう」「1回だけ見ます」（1セットのみ）
展 開	各自練習	「発見した違いや、筆使いに注意して書きま しょう」（机間をまわり、助言したり筆をもってやったりする）
終 末	「今日の一番」に名前を を書く	「練習した中で一番よいと思う作品に名前を書きま しょう」

《導入段階での活用》

ビデオ活用のねらい 練習している時に、分からないことや困っていることについ
て知りたいときに自分なりにめあてをもって見る。

	学習活動	教師の指示・説明
導 入	学習する文字を知る	教師が水黒板に書く。「どんなことに注意したらよ いか考えながら見てください」（解説なし）
	学習のめあてを知る	「文字の中心に注意して書く勉強をします」
	空書をする	「概形・筆運び・とめ・はね等に注意しましょう」
	試書を行なう	「書いた人は手本と比べてみよう」
展 開	各自練習	「発見した違いや、筆使いに注意して書きま しょう」
	範書ビデオを見る	「筆使いや形などの注意事項を知りたい人は、自由 にビデオを見てください。何度見ても構いません」

（以下同じ）

3. 児童の反応と感想

テレビの前に集合した子どもたちは、範書場面の映像が映し出されると、真剣に見た。子どもたちの中には、映像と同時に流れる「説明ことば」を聞きながら、「右上がり」「内側に」などを、指で空書をしている子も見られた。

導入段階で1回だけ見た子ども達（「導入グループ」）と、自由練習のときに何度でも見ることができた子ども達（「自由練習グループ」）の様子は次のように見受けられた。

- ・「導入グループ」は、1回しか見られないということで、ビデオ1～3すべてに、見る姿勢に真剣さが感じられた。
- ・「自由練習グループ」では、はじめこそ一斉に見ていたが、なかにはビデオ3まで見ないで、ビデオ1やビデオ2で座席に戻り、書き始める人がいた。
- ・「自由練習グループ」はビデオ3まで一通り見終わると、それ以後ひとりもテレビの前に来て見ることはなかった。しかし、よく観察していると自分の座席から何度も見ているようであった。（最後尾の座席からでも映像・音声ともに十分に視聴できたようだ）
- ・座席からビデオを見ている子のなかには、一文字または一画ずつビデオの説明ことばを聞きながら書いている人がいた。

授業後に書いてもらった感想文には次のようなものがみられた。

- ビデオを見たり自由練習をして楽しかったです。さいしょに書いてそのあとにビデオを見て書いたら少しわかったからよかったです。
- ビデオ3がとても参考になりました。筆の動かし方や使い方もわかりました。これからも今日やったみたいなやり方でいけば、字もうまく書けると思います。
- 田中先生がふでのつかい方やいろんなせつめいをしてくれたから、はじめにかいたときよりも、うまくかけました。でも田中先生がかいているときしせいがうつっていないから自由練習のとき、しせいがわるくなりました。でも工事の音であまりきこえませんでした。（筆者註。録画中、校庭で工事が行なわれていた）
- わたしは3番目のビデオがいちばんさんこうになりました。わけは、曲がるところが、わたしははみ出てしまって、先生のを見たら、出ないほうほうがわかりました。
- 今日の習字はビデオを使って、分からない時とか見てもよい、という所がやくだちました。あんまりうまくかけなかったけど、ビデオを見ながら書けばやくだつと思います。
- いちばんさいしょはすごくへただったけど、2・3枚目のときに、ビデオ3を聞きながら書いたら、1枚目よりもすごくうまくいったので、ビデオのおかげでできたと思いました。

4. 今後の課題

範書用ビデオの作成段階においては、不慣れな操作や煩雑な編集作業があり、予想をしていた通りの苦労があった。しかし、実際の授業場面での子どもたちは、ビデオによる範書は初体験ということもあり集中度が感じられ、彼らの感想などを見聞しても一定の成果があったように思う。

今後、今回のようなビデオを作成し、授業での活用を試みる際に次の点に留意すればさらに効果的な活用ができると思われる。

○作成段階において

- ・すべての作業を単独で行わず、機種操作・編集などを数人で分担して行なう。
- ・年度当初に1年間の教材すべてを映像にしてしまう。学校内のすぐれた書家をお願いして1教材1作品ずつ書いて頂き、編集時に活用しやすいように工夫する。

○活用段階において

- ・ビデオ特有の機能（一時停止・スローモーション・繰り返し）を十分に活用する。
- ・範書はビデオのみに頼らず、水黒板・チョーク・OHPなど、他の方法と混合して使用し、それぞれの長所を生かして採用する。
- ・指導者は映像が流れている間の時間を有効に使う。例えば、基本的技能が身につけていない子どもへの対応・ビデオの説明ことばの補足・作品の評価や批正などが考えられる。

高価な既成の映像資料を入手することも学習を充実させる一つの手段になると思うが、私にとっては、眼前の子どもたちの実態にあった映像資料を作成してみることも貴重な体験となることを実感した試みであった。

写真1. 収録のようす

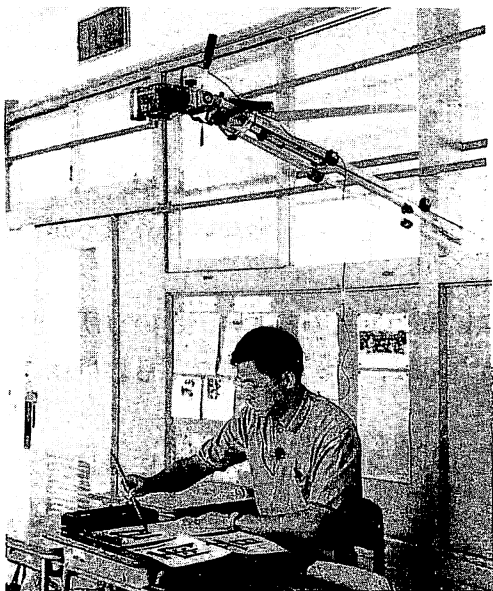
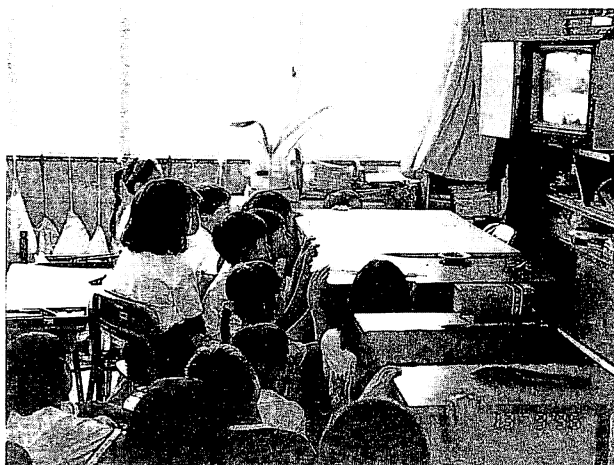


写真2. ビデオを見る子ども達



書道クラブの（部）の指導

加賀市立東和中学校 教諭 小座間 美智子

1. はじめに

近年、中学校の日常生活から「書道」が遠くなってきたように思う。週一時間の書写の授業と校内書き初め大会がかろうじて筆を持つ機会として残っているだけである。学校によっては「書道部」のないところもあるが、幸いこの数年間いた学校では部が存在していたので、部の指導を通して「書写書道教育」について考えてみたいと思う。

2. 書道部の活動実践

(1) 部員の実態

部員数は年によって違うが、5・6名から10名くらいである。入部動機は、学習塾に行くため、練習時間の少ない文化部を希望したという生徒がほとんどで、あとは運動部からの転部である。つまり、積極的にやりたいと意欲を燃やしている生徒は皆無なのである。

(2) 部活動の内容

基礎練習も大事であるが、書道に親しみ楽しく活動することに重点をおくことの方がこの部員達に合っていると考え、作品作りを中心に組んでみたところ、予想以上の成果を見た。

① オリジナル色紙（かな・短歌）

〈作り方〉

- ・ 工作用紙を色紙大に切って台紙とし、各自家から持ってきた包装紙で覆い、その上に書道半紙を重ねて下の包装紙の模様や色がほんのりと浮き出るようにし、ふちをつける。
- ・ 百人一首の中から好きな和歌一首を選び、全体の配置などを考えてまとめる。
- ・ 自作の短歌を色紙にまとまりよく書く。

〈生徒の様子〉

まず、顧問がオリジナル色紙の作品を見せてイメージ化を図り興味付けをする。興味を持った生徒達は家から思い思いの包装紙を持ってきて色紙作りに取りかかる。ここで、たいした包装紙でないのにとてもシックなものが出来上がったり、逆に包装紙だけ見たらさぞかしと思わせるようなものがあまり面白くなかったり

と思ひもかけぬ結果となり、色紙作りもなかなか楽しくできた。多い者で10枚、少ないものでも6、7枚準備できた。手作りで苦勞して作った色紙でしかも枚数が少ないとあって、清書をするまでに思った以上の練習をしていたように思う。基本練習をやらせるより、するように追い込む課題を与えた方が効果的であると実感した。どの作品もそれぞれ味わい深く出来上がり、満足げであった。自作の短歌を作品にしようと提案すると、「えーっ」と言いながらもまんざらでもない様子で、同様に作品に仕上げる。「〇〇子かく」も気に入った様子で、ここまできたら、落款が欲しいということになった。

② 篆刻

〈作り方〉

- ・ 「五体字類」で自分の名前の篆書をくる。
- ・ 名前を篆書で書く。
- ・ 石にうつしとる。
- ・ 石を刻む。

〈生徒の様子〉

篆書にはとても興味をもったようで、家族の名前も調べるなど意欲的であった。篆刻はなかなか面白いものが出来上がり、色紙のかな作品には大きすぎるのだが、墨に朱の印がはえて、見ばえのする作品になった。

③ 半切の作品

小さな作品が続いたので、文化祭に向けてということもあり、半切に大きく四字熟語を書くことにした。好きな言葉を選ぶところから始まり、いよいよ新聞紙で練習が始まった。形がそこそこ書けるようになると、少しもったいないとは思ったが、半切に思い切りよく何枚も書かせた。生徒達は気持ちよく楽しんで書いていた。

〔温故知新、以心伝心、一期一会、榮枯盛衰、花鳥風月、完全無欠、公明正大、山紫水明、質実剛健、切磋琢磨、不言実行、不撓不屈、粉骨碎身など〕

子供らしくのびのびと元気のいい字に仕上がったので、表装してもらい、掛軸にして展示した。落款もあり、見事な作品となり、皆にも好評であった。

④ 水墨画

時々練習の合間に、筆で絵を描いている生徒がいて、それがとても上手なので、水墨画をやってみることにした。練習本の中から竹とからんなどの筆使いを練習したあと、濃淡に工夫しながらいろいろな絵を描かせてみたところ、生徒ならで

はの面白い作品が出来た。鉢植えの花と一緒に描いたり、画と文字を合わせてみたり楽しい活動となり、いつの間にか合評会に発展していった。生徒の感性はすばらしく、この時ばかりは、指導する者・される者の垣根がなくなり、真のクラブ活動を味わったように思う。この頃からである。部員達の筆箱の中に筆ペンが入ってきたのは。手軽に筆で字を書いたり画を描いたりして日常生活の中に大いに使うようにすすめてきた効果が少しずつ出始めてきたのは何ともうれしいことである。

3. 終わりに

クラブ（部）活動という自由さから出来るということもあるが、「楽しく書く」ということが一番大事であろうと思われる。

クラブ（部）活動を通して、書道の総合芸術性を実感したし、書道の奥深さを痛感させられた。一字一字の漢字・仮名の持つイメージ、一語一語の言葉の面白さ、それを句や文にした時の流れ、一定の紙にまとめる楽しさ、そこにあらわれる人間性——歴史であり人生であり、芸術である。クラブ（部）活動であるから、評価というものにあまり重きをおかずに、一人一人の生徒の意欲と充実感に重点をおいたが、はからずも生徒の中から合評会なるものが出てきて、一人一人の作品に対する温かい批評がなされたとき、生徒から教えられたと感じた。

言語に対する感性、美に対する感性、人間に対する感性、を磨く、つまり、人生の生き方があらわれる芸術、それが「書道」であり、それを共に学んでいくのが、「書写・書道教育」なのではないかと思われる。

Memo :

[The body of the memo is extremely faint and illegible. It appears to contain several paragraphs of text, but the characters are too light to be transcribed accurately.]

米芾の書と書業について

石川県立輪島実業高等学校 講師 木下 信子

はじめに

私は石川県高等学校教育研究会書道部会に長らくお世話になっております。

高校時代にも書道の選択をしていなかったのですが、書道の授業を担当することになってから未知の世界での暗中模索の長い行脚がはじまりました。

生徒は指導者のレベルより上にあがらない事を知っておりますので、書ける教師を望み、古典臨書を中心に孤独な求道者の歩みを続けました。そして、ごく最近書道史等に目を通す心の余裕がでてきました。

今回は中国北宋の巨腕米芾の書と書業について調べてみました。

ある方が「米芾の真蹟に出合ったとき、涙した。」と申されました。そのような体験をする事もない自分ですが次の要領で論を進めさせて頂きます。諸先生方のご指導を賜れば幸甚でございます。

- I、中国書道史における米芾の位置
- II、高校の書道教育における米芾の書の取り扱い
- III、米芾の書と書業
- IV、まとめ（平淡天真について）

I、中国書道史における米芾の位置

中国3500年の書道史をかけ足でみると

1. 甲骨文の時代（殷）
2. 篆書の時代（周・秦）
3. 隸書の時代（漢）
4. 楷行草成立の時代（六朝）
5. 書法定着の時代（唐）
- ⑥. 唯美主義への反発（宋）
7. ロマンチズム運動（明）
8. 実証主義の台頭（清）

となるが、米芾は⑥の宋代の人である。

宋の書を代表するのは北宋の書であり、これを二分するならば、前期の復古主義の時代と後期の革新時代となる。

長い戦乱の後、再び中国を統一した宋王朝が目指すところは興盛を極めた唐であった。従って書道の上でも二王が尊ばれ、唐の太宗のとき作られた淳化閣帖にも王羲之父子の書が大半を占めた。しかしその復古主義も長くは続かず、大商人や大地主の台頭は唐代貴族とは全く異質な革新的気風をもたらした。

書の柱もこの革新精神であり、その代表格が蘇軾・黄庭堅・米芾であった。

これ迄の書を大別すると王羲士風と顔真卿風の二つに分けられるが、彼らはそれら二つを研究しながらも、そこから独自の極めて人間味のある書風を生み出した。

蘇軾の黄州寒食詩巻にみられる気魄雄大な書、黄庭堅の禪の修養からきた鋭い気意。そしてこの二人に比べ米芾は、本格的に書を学んだ人であり、王羲之の型を最もよく摂取した。更に晋人の真蹟に傾倒し、石鼓文にまで及び、竹簡をもよしとした古法追求者となりこれらを完全に自己消化し、最高の域に達し平淡天真の高い精神を見出したのである。

今井凌雪先生監修の「書を学ぶ人のための図説中国書道史」に十大作家名が挙げられている。(1. 王羲之、2. 欧陽詢、3. 顔真卿、4. 蘇東坡、5. 米芾、6. 趙孟頫、7. 董其昌、8. 王鐸、9. 鄧石如、10. 趙之謙) 米芾はこの十名の中に挙げられ、書の本源を究めるべく、晋や唐の名家の書を詳細に研究し、筆の機能を十全に発揮した技術的水準の高い書風を完成した。「蜀素帖」「草書四帖」などが紹介されている。

II、高校の書道教育における米芾の書の取り扱い

高校の芸術科書道の教科書は、入門期に書体と書風の説明、文房四宝、執筆法が説明され、楷書、行書、草書、仮名、作品制作、生活の書など執筆者の意図に従って各社が制作し、文部省の検定に合格した後、発行する。巻末には必ず日・中の書道史年表と中国の旧地名の載った地図がついている。指導者はその内一冊を選び、これを使って学習指導を進める訳である。

以下、教科書に掲載されている米芾の書を挙げてみる。

1. 高校書道Ⅰ (大阪書籍)

・李太師帖 (宋代の行書の代表作) 【資料①】

・苕溪詩巻 (王羲之など晋人の風趣をもとに明快でのびのびとした味わいがある) 【資料②】

2. 高校書道Ⅱ (大阪書籍)

・致知府大夫書 (晋人の書を中心に学び、そのうえに彼独自の書を完成した) 【資料③】

3. 高校書道Ⅲ (大阪書籍)

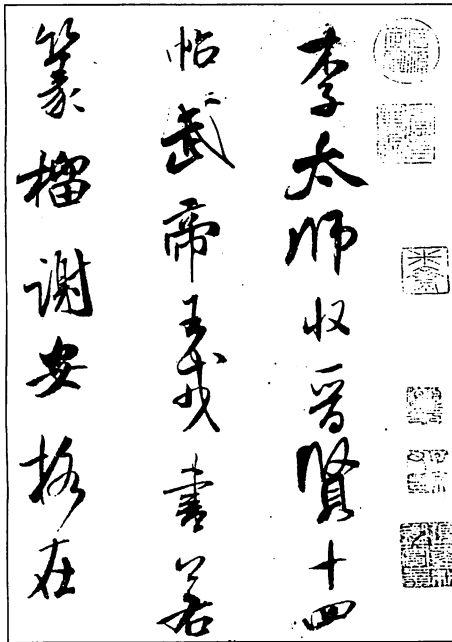
・徳枕帖 (尺牘で、おおらかな気分で堂々たる迫力を感じる。) 【資料④】

4. 書道Ⅰ (光村図書)

・与通判帖より「望」の一字

- ・蜀素帖より「雲」の一字
- 5. 書道II (光村図書)
 - ・蜀素帖 (口絵に掲載) 【資料⑤】
- 6. 書法I (角川書店)
 - ・張季明帖 (王羲之の書を典型として習い、特に書法的に新しい展開をなし遂げた作家) 【資料⑥】
- 7. 書法III (角川書店)
 - ・元日帖 (宋の三大家のうち、書の技量のみについていえば、米芾が最も優れていよう。このようなすなおで無理のない筆法が最上の書、これこそ自在無礙むげの書と言うべきである。 【資料⑦】
- 8. 書道I (東京書籍)
 - ・苕溪詩卷 (米芾38歳の書、運筆は自然でよく線が伸び明快で格調の高い書である。) 【資料②】
 - ・苕溪詩卷より「雪」「月」「花」
- 9. 書道I (教育出版)
 - ・古典集字資料として「敬」の一字
- 10. 書道III (教育出版)
 - ・李太師帖 (口絵、き冴えき冴えとした筆致を見せるこの作も彼が晋人の書法に深く精通していたことを物語っている) 【資料①】
- 11. 書道芸術I (中教出版)
 - ・蜀素帖より「泉」の一字
 - ・小字数の創作の資料として、「雲」「心」「愛」「道」
- 12. 書II (教育図書)
 - ・李太師帖 (王羲之の書に大きな影響を受けたといわれる。晋時代や唐時代の名跡を学び、それを基礎として、独自の書風を完成させた。) 【資料①】

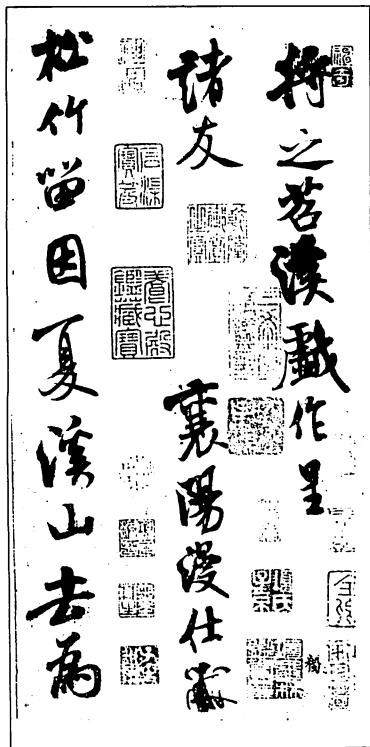
以上12冊の教科書にみえる米芾の書は、行書制作の手がかりとして各社が多く取りあげ、参考集字の中から字形のとり方、一字の構成や行書成立と発展の中に必ず取り上げられている。芸術性高く、難易度の高い作品はもっぱら鑑賞用に使われ、名跡紹介にとどまっている。ここに高校書道指導者の課題があると思います。



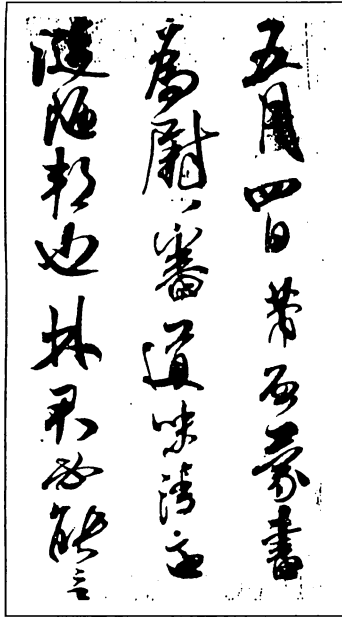
【資料①】 李太師帖



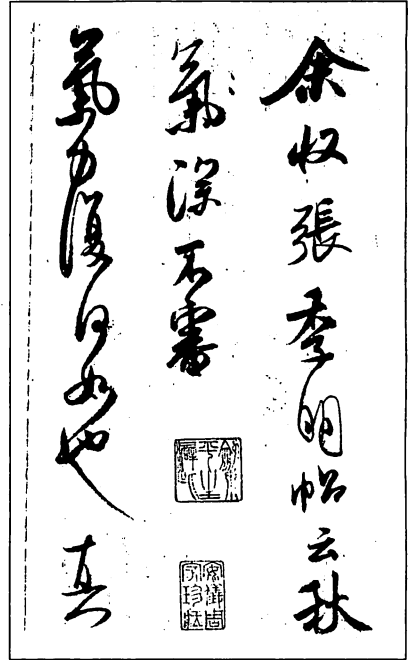
【資料③】 致知府大夫書



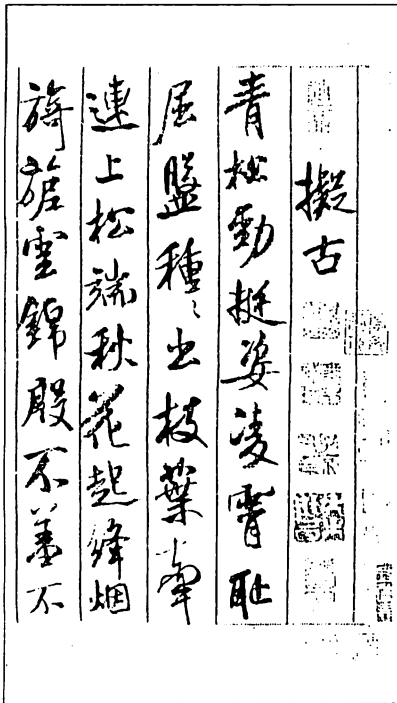
【資料②】 荅溪詩卷



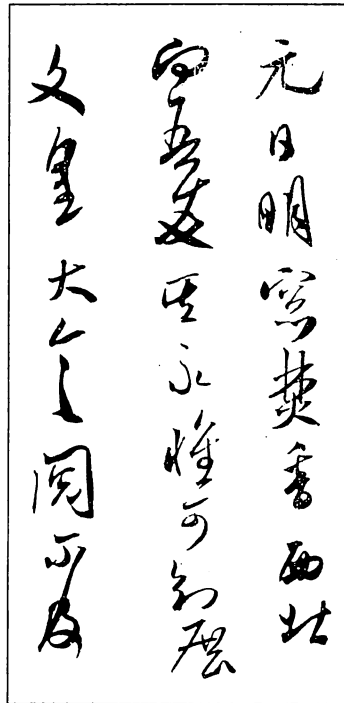
【資料④】 德忱帖



【資料⑥】 張季明帖



【資料⑤】 蜀素帖



【資料⑦】 元日帖

Ⅲ、米芾の書と書業

1. 米芾の人となりと書について

(1)、経歴

米芾はシルクロードから中国に移り住んだ家系に生まれた。北宋興宗の皇祐3年(1051)湖北の襄陽の人というが、先祖は山西の太原に住んでいたらしい。母の 氏が英宗皇后の乳母として仕え、その恩恵によって科擧抜きで校書郎のポストを得た。

彼の墓誌銘(鄭肇の撰)には — 科擧の学に従うを喜ばず、議論、己れの意を以て断ず。 — とあり、受験しようとしなかった。自由奔放な発想で、独創性を持つ米芾は、予め決められた枠の中で従来の定説を墨守する学問に、生理的な嫌悪感をもっていた。宋代官僚は歴代でも最も高給をとっていたが、彼はその恩恵を受けながら、役所の仕事はあまりしなかったようである。

米芾は「蘇黄米蔡」と北宋の四大書家の一人にあげられたが、四人の中で米芾は最も若く、傍若無人で、徽宗皇帝の前でも「黄庭堅は字を描くだけで、蘇軾は字を画くだけである」とけなした。しかし黄も蘇も米にけなされて腹を立てた形跡はなく、若い米をゆるし、可愛がっている。彼らは天才を理解でき、包容することができたらしい。米はまた「米顛」とか「米痴」といったニックネームで呼ばれた。奇岩に出会うとその場で跪いて拝む等の奇行のエピソードが多い。アメリカの美術史家マイケル・サバリンは米芾たち文人画家について、「彼らはつとめて独創的であろうとしたのではなく、彼らの芸術が本来独創的な個性の真摯な、しかも自然な発露であった」とのべている。これは書についても言えることであった。

米芾は自分の書齋を「宝晋齋」と名付けた。彼の美意識は晋をめざした。当時の書人は唐の顔真卿を意識することが多かったが、米芾はあくまでも晋の王羲之を過去の最上の作とし、それを越えようとした。又自分は越えたと公言したこともあった。

天才的なカンをもつ米芾は、書画の鑑定にもすぐれていたため徽宗皇帝の書画収集の顧問をつとめた。

官歴としては、中央では礼部員外郎(文部省課長級に相当)が最高で、地方勤めが多くそれも南方各地が主で、彼はやはり江南の山水を愛した。呉江(蘇州の南)の垂虹橋のほとりの垂江亭で作った七言絶句は

断雲一葉洞庭帆 玉破鱸魚金破柑
好作新詩寄桑苧 垂江秋色滿東南

とあり、これにより米芾の芸術は「動き」に重点が置かれていることがわかる。彼の芸術の基本は奔放にみえて、じつは動きを念頭に置いて彫って行くところにある。

大観元年(1107)任地の湖北で死んだ。号は鹿門居士。襄陽漫士、海岳外史。

(2) 論書と書の展開

米芾が自分の体得した書法の要訣と自分の学書の経歴を簡単に述べた文（自叙書法）が羣玉堂帖の中の米帖に載っている。

円熟した立派な行書で大書したもので彼の晩年に近い書と思われるものである。

「自分は始め顔真卿を学んだ。7、8歳の頃は非常に大きな字を書いていたので一枚の紙にまともらなかった。後に柳公権の書を見てその緊結を慕い、柳の金剛經を学んだ。

やがて柳が欧陽詢から出ていることを知って欧を学んだ。そうするといつしか字が印版、排竿のようになってくる。そこで褚遂良を慕い、最も長く習った。また段季の転摺肥美で、八面出法を慕ったが、やがて段が全く蘭亭の筆法からでてきたものであることを覚ったので、遂に法帖をもあわせて見るようになって、晋魏の平淡に入った。鐘繇の四角い字を棄てて師宣官を手本とした。その劉寛碑を習ったのである。篆書では詛楚文と石鼓文が好きである。また竹簡は竹の^{よて}筆を以て漆で書いたものである。鐘鼎の銘は古老の点があえもいわれぬことを悟った。書壁の字は沈傳師を主とした。小字は大いに取らない。」と。

この顔、柳、欧、褚、段、蘭亭、閔帖という系譜の中に示された彼の学書の経路が彼の学書の方向の概要を示している。彼の書法贊に、「顔肉を去り褚骨を増す、天秀を発し神仏を助く」というのは、顔を捨てて、褚に至って天真を見出したことを言ったことばである。元豊二年（1079）29歳、長沙に仕官して欧陽詢の度尚帖を南昌の魏泰から入手し、元豊五年（1082）32歳、山陽において鐘離景伯から欧の「庾亮帖」を入手して、元祐五年（1090）40歳に度尚庾亮帖贊を作っている。その句に「渤海兒怪字亦險絶、真到内史、行自為法」とあり、欧の字を怪といい險絶といい、羲之の真書、行書こそ本来の法と為ることを説いている。

このような学書とその経路は、およそ30歳代から40歳前後にかけてのことで、彼の前半生は、書においては唐の顔、柳、張、素より以前に目標があり、焦点となっていたのは魏晋の平淡にあったことは自ら述べているとおりでである。

この間の彼のが学書の背景となったのはその環境と交遊に負うところが多い。

元豊七年（1084）34歳の時、黄冈において蘇軾と会い、書は晋人を学ぶべきであることを教えられて、それより晋人の書を学ぶようになった。今元豊六年（1083）に書いた杭州龍井山方円庵記があり、その温革の跋にこのことが見える。方円庵記の書も彼の壮年期の書のたしかな一例として見ることの出来る最もよい例に属すると中田勇次郎氏は言う。

元豊七年の翌元祐元年（1086）36歳8月に宝章待訪録が成っている。これが彼の当時の収蔵家の名士たちの所蔵になる法書の鑑識、収蔵、閲玩、購求についての鑑賞録で、一々に法帖についての要点をまとめてもので、短文であるが、よく鑑賞の条件を

満たした記録の方法によって作られたもので、二王の書のほか晋賢十四帖もすでに登録されている。36歳の頃、すでにこれだけの名品（漢の張芝をはじめ魏晋南北朝隋唐五代の楊凝式まで含まれている）をよく鑑賞していたことが一目瞭然としてわかる。

これと並び、書史もまた歴代の法書の名品についての鑑賞録で、その成立は、崇寧三年（1103）で彼の没する5年前にできた。記事は大体前者よりくわしい。

もう一つ米芾には、自らの収蔵品を収録した米南宮秘玩法書目があり、彼の鑑賞した法書が他にも多かったことがわかる

話を前に戻して、彼が33歳のとき書いた龍井方圓庵記の跋を書いた清の翁方綱のことばを借りると「これは蘇軾に会ってから晋人を学ぶようになってはじめての書で、用筆が晋帖の意を得ている」と。いかにも方圓庵記の書は最も王羲之の聖教序に近い。又清の王澐は米が38歳の時書いた蜀素帖を評して「米芾は王羲之の聖教序のことは一言も語ったことはないが、実は蜀素帖の筆法の一筆一筆聖教序から来ている。そして一向に知らぬ顔をしている」と。

つまり方圓庵記では字の形に至る迄、聖教序に彷彿たるところがあるが、蜀素帖になると聖教序の筆意があっても、それはすでに自己のものとして消化されている。その間の進歩はすばらしいものがあるが、聖教序ばかりを学んでいたのではない。41歳前後の書と推定される叔晦帖をみると、すでに今日智永の真跡千字文などから想像する南朝末期あたりの爛熟した巧緻を極めた筆法をすっかり手に入れている。

更に彼は二王以前の高古な風格を慕った。二王以外の晋人の真跡を集めたいいわゆる晋賢十四帖を見て、爾来それらの人々の書風に非常に傾倒した。この晋帖のことを草書で書いたものが羣玉堂の米帖に刻されているが、松井如流氏はこれについて次のように述べておられる。

「米元章の超逸入神、沈着痛快の書法（蘇東坡のことば）をこころゆくまで味わうことのできることを幸としなければならない。草書帖は玉をころがすような風姿、そして厚みのある用筆。いかにも晋人の風をよく取り入れて少しも淀みを見せない。この調子は、真蹟の草書九帖によく似ている。草書九帖は元章47から52歳の間に書かれたと推定されるから、羣玉堂所蔵の草書帖もおそらく50歳前後のものでないかと思われる。元章の最も油の乗りきった時の作ということが出来よう。又行書帖は字も大きく堂々としており、のびのびとしてしかも渴筆のところの激しさ、これこそ元章の日頃の名調子であり「快劍陣を斫り、強弩千里を射る」と評した黄山谷の言葉の通りである……」と。

米芾の学書の方法に臨模の法がある。世に彼の臨模と伝える法書法帖の数は少ない。ただ彼が古法書を基本として一字一字臨模によって書いたので彼の書を集古字と呼んだという記事があるが、それは30歳代から40歳ぐらゐまでに考えられたことである。又署名に40歳迄は齧を用い、41歳以後は芾字を用いたという。

40歳以前の作を拾うと、元祐三年（1088）の苕溪詩卷、蜀素帖および行書真蹟三帖の叔晦帖があり、又栄光堂帖の尺牘に馮字の署名がある。

叔晦帖は集古字の感が強く、張季明帖は初めより張旭帖の臨模である。

40歳以後の苕の署名の作はかなりの数があり、尺牘のたぐいには魏晋の手法の域に入った書風が多くみられる。米芾は晋人の尺牘の真蹟本をとりあげてそこに見出したのが平淡天真の高い精神であった。

この点では同時代の蘇軾や黄庭堅の尺牘とは全く趣きを異にしている。しかも米はその根底に法書の鑑識と収蔵、閲玩、購求にわたりあらゆる好尚への深い大きな努力の投入があった。それがすぐれた作を生み出したと言える。

米芾には尺牘の他にもう一つの道があった。それは文人の詩卷による横卷形式の大作が見られることである。本来書と言えば尺牘が手本となっていたが、盛唐の頃の革新的な書の流行にともなって、詩文を横卷に大書することが行われるようになった。張旭にその例があり、懷素に自叙帖卷があり、横卷大書の好例を示している。

宋に入って士大夫の間に詩文の横卷が多くあらわれ、蘇軾・黄庭堅に例は少くない。米芾もまたその書風を横卷に託した大作が見られる。苕溪詩卷や蜀素帖は古式に近いが、虹縣詩卷、呉江舟中作などは大書の例で、これもその数は乏しくない。この巻になると、彼の天真はさらに又清新さを加えて晋人の風気より一步進めた境地を作っている。

晩年にかけての遺作は、魏晋の風韻から出た種々の新しい作があらわれている。宋代に流行した填詞を書いた満庭芳詞（宝晋齐法帖1094年）がめずらしく、石刻の碑文にも行草の独自の蕭散逸脱の氣象あふれた作をみる事ができる。

この反面、小楷千文（1104）、大行皇太后挽詞等があり、その才能の多様と書の専門家としての力量を物語っている。

彼の生涯を通じて考えられることは、鑑賞家としての一貫した方法と理論であり、思想の上では魏晋の平淡を基本として宋代としての新しい哲学を背景とする社会にあって、高い心境を平淡天真の話をもって表現したことであり、作品の上でもこれがよく表れていると見るべきである。

IV. まとめ (平淡天真について)

再度羣玉堂帖の行書帖に戻る。

はじめに執筆法を論じて、「筆をとること軽ければ、自然に手心が虚となり、振迅天真意外に出ることが出来る。故に古人の書は、各々同じではない。もし一々相似るならば、すなわち奴書である。筆を得ることが大切だ。骨筋皮肉、脂澤風神みな全く、なお佳士のごとくありたい。筆に同じでなければ三字三画が異なるようになる。故に異をなして、重軽は同じでない。これは天真に出てこそ自然に異なることが出来よう。また書は毫を使うのではなく、毫は墨をやるだけのものだ。それだからこそ渾然天成となる。また筆を得れば、細きこと髭髪をなすけれども、またまどかな調子を出すことである。筆を得なければ大なること椽たるぎのようでも、また狭小なものとなってしまう。このことをよく心得て学ぶべきである。初学者はまず壁に字を習うことがよい。必ず手をかかげて、鋒を壁に達せしむべきである。こうした学習が久しければおのずから趣を得るであろう」と。

この境地に達する。これは一朝一夕にできることではない。「海岳名言」に「一日書せざれば便ち思いの渋おるを覚ゆ」とこの天才にして語っている。とに角、書いて書いて書き続ける。その繰り返しの中で、ある日突然、体得するのではなからうか。平淡天真に書くということが。

今、蜀素帖の解説・釈文(江兆申)を開いて釈文を辿りながら彼の文章のすばらしさにくうっとりとしてしまった。そして一点だけが蜀素帖のコピー(中華民国故宫博物院編纂表装・台北青玄堂)を所有していて、目の前に開いている。

彼の書芸術に対する生命がけの思いがひしひしと伝わってくるのを覚える。

「米芾に学ぶ」これは一生ものだと痛感した。書の美の追求！これは永遠の課題である。

参考資料○高校書道各教科書

- | | | |
|-------------------|------------|-------|
| ○蜀素帖 (中華民国故宫博物院) | 宋 米芾 | |
| ○米元章 羣玉堂帖、苕溪詩卷他4種 | 珊瑚帖・拜中岳命作也 | 二玄社 |
| 改訂書道の古典 | | 二玄社 |
| ○書道全集 中国10 宋1 | | 平凡社 |
| ○墨87号 | | 芸術新聞社 |
| 図説中国書道史 | | 芸術新聞社 |
| ○趣味講座 書道に親しむ | | NHK出版 |
| ○書道資料集「書の世界」 | | 中教出版 |
| 書道芸術 漢字編 | | 中教出版 |
| ○国立故宫博物院蔵 宋四家墨蹟選 | 中華民国 | |
| ○書学大系 | | 同朋社 |

以上

連 盟 の あ ゆ み
連 盟 役 員 一 覧
大 会 役 員 一 覧
連 盟 規 約

石川県書写書道教育連盟のあゆみ

1987. 1. 23 有志が集い県下に校種一貫した書写書道教育研究組織設立に向けて懇談する会を発足させ
(昭和62年) る。(1988. 2. 26迄に9回の会合を開く)

1988. 4. 22 石川県書写書道教育懇談会と改称し第1回の会合を持つ [金沢大学教育学部書道演習室]
(昭和63年) (1995. 10. 5迄に48回開催する。)

1989. 8. 29 石川県書写書道教育連盟設立総会 [ホテル六華苑]
(平成元年) (平成2年度に第1回石川県書写書道教育研究大会開催することを決定)

平成元年度 石川県書写書道教育連盟役員 (敬称略)

- 名誉顧問 金子曾政<元金沢大学学長>
顧問 南 和男<石川県教育長>
相談役 北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 氷田茂良 横西 清
- 会長 藤 則雄<金沢大学教育学部長>
副会長 [石川県教育委員会学校指導課長] 三宅正敏
[金沢市小学校教育研究会書写部長] 河本隆成<金沢市立馬場小教頭>
[金沢市中学校教育研究会習字部長] 大野重幸<金沢市立金石中校長>
[石川県高等学校教育研究会書道部会長] 佐藤政俊<金沢女子高校長>
[石川書写の会会長] 山田泰正<鹿島町立越路小校長>
[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者] 法水光雄<金沢大学助教授>
- 理事長 [金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者] 兼 任
副理事長 : 幼・保部: 嘉門久直<森本幼稚園長>
: 小学校部: 森川登夫<津幡町立中条小校長> 谷村修次<小松市立蓮代寺小校長>
: 中学校部: 松寺淳照<金沢市立森本中教頭>
: 高校部: 中山武久<津幡高校教諭>
- 監事 吉田 一郎<小松市立向本折小校長>
木本峰生<七尾市教育委員会学校教育課長>
- 理事 : 県教委学校指導課:
[小学校・中学校(国語科書写)担当指導主事] 永井志津子
[高等学校(芸術科書道)担当指導主事] 高沢幹夫
- * 金沢地区
: 幼・保部: 青山洋子<みどり・かわい幼稚園副園長>
: 小学校部: 林 道子<南小立野小教諭> 中川晃成<館野小教諭>
: 中学校部: 干場和子<野田中教諭> 古本佳世<野田中教諭>
: 高校部: 林 昭悦<金沢女子高教諭> 石浦義彦<金沢泉丘高教諭>
: 障害児学校部: 南 進 <県立養護学校教頭>
- * 加賀地区
: 小学校部: 穴田孝子<三谷小校長> 川筋登史己<向本折小教頭> 市村良二<木場小教諭>
: 中学校部: 阿戸壮一郎<丸ノ内中教頭>
: 高校部: 東野洋子<小松市立女子高教諭> 北室正枝<金沢西高講師>
: 障害児学校部: 川上千鶴子<小松養護学校高等部主事>
- * 能登地区
: 小学校部: 西野和代<天神山小学校長> 福田教導<金ヶ崎小学校教頭>
: 高校部: 堀喜代子<飯田高校教諭> 大場豊治<七尾高校教諭>
- 事務局
: 事務局長: 永江芳教<金沢商高教諭>

:副事務局長： 久田英夫<金沢中央高校教諭> 中川晃成<館野小教諭>
 :庶務部： 部長・中田稚子<森本中教諭> 副部長・宮嶋雅美<明和養護学校教諭>
 :会計部： 部長・仙さえ子<千代野小教諭> 副部長・八田和幸<鳴和中教諭>
 :研究部： 部長・金田京子<宇ノ気小教諭> 副部長・嵐 雪絵<金大付属中講師>
 :会報部： 部長・板橋法子<河南小教諭> 副部長・西尾恵美子<中島小教諭>大坂育代<湯野小教諭>
 :研修部： 部長・八田和幸<鳴和中教諭> 副部長・北村千恵<山中小教諭>
 :調査部： 部長・大浦 努<大浦小教諭> 副部長・宮崎聡美<松波小教諭>西川真理<野々市小教諭>

11.15 第4回全国大学書写書道教育学会・平成元年度全国大学書道学会
 ~17 平成元年度日本書道教育全国書道教育部門会《後援》

12. 1 第1回理事会 [金沢商業高等学校]

12.10 『石川県書写書道教育』(創刊号) 発行

1990. 5.18 第2回理事会 [金沢商業高等学校]

(平成2年)10. 1 『石川県書写書道教育』(第2号) 発行

11.19 第1回石川県書写書道教育研究大会

[金沢市立南小立野小学校・金沢市立野田中学校・石川県立金沢泉丘高等学校]
 第3回理事会

1991. 2.23 第4回理事会

(平成3年) 3. 1 『石川県書写書道教育』(第3号) 発行

6. 4 第5回理事会 [金沢商業高等学校]

10.30 『石川県書写書道教育』(第4号) 発行

11.18 第2回石川県書写書道教育研究大会

[野々市町文化会館・野々市町立野々市小学校・石川県立養護学校]
 第6回理事会

1992. 3.26 第7回理事会 [金沢ガーデンホテル]

(平成4年) 3.30 『石川県書写書道教育』(第5号) 発行

5.28 第8回理事会 [金沢中央高等学校]

10.20 『石川県書写書道教育』(第6号) 発行

11.18 第3回石川県書写書道教育研究大会 [金沢市立鳴和中学校]

第9回理事会

1993. 3.30 『石川県書写書道教育』(第7号) 発行

(平成5年) 6. 4 第10回理事会 [金沢中央高等学校]

11.18 第4回石川県書写書道教育研究大会

[石川県立金沢商業高等学校・金沢市立富樫小学校・石川県立金沢泉丘高等学校]
 第11回理事会

1994. 3.31 『石川県書写書道教育』(第8号) 発行

(平成6年) 6. 4 第12回理事会 [金沢中央高等学校]

第4回石川県書写書道教育研究大会第1回実行委員会

10.19 第5回石川県書写書道教育研究大会 [小松市立女子高等学校・小松市立安宅小学校]

第13回理事会

12. 1 『石川県書写書道教育』(第9号) 発行

1995. 3.30 『石川県書写書道教育』(第10号) 発行

(平成7年)

6. 6 第14回理事会 [金沢商業高等学校]

石川県書写書道教育研究大会のあゆみ

1990. 11.19 第1回石川県書写書道教育研究大会

- 「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」
- 豊かな体験を通して感動する心を求めて—
- 文字意識を高めるための基礎基本のあり方—
- [金沢市立南小立野小学校／野田中学校・石川県立金沢泉丘高等学校]
- ・公開授業（小学2年・中学1年・高校1年）
- ・記念講演「新学習指導要領のめざす書写書道の学習指導」
久米 公先生（文部省視学官・千葉大学教授）

1991. 11.18 第2回石川県書写書道教育研究大会

- 「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」
- 豊かな体験を通して感動する心を求めて—
- 文字意識を高めるための基礎基本のあり方—
- [野々市町文化会館・野々市町立野々市小学校・石川県立養護学校]
- ・公開授業（小学校1年・6年）養護学校（学校公開／クラブ活動等）
- ・記念講演「児童生徒の心をひきつける具体的な指導法」
續木湖山先生（帝京大学教授）

1992. 11.18 第3回石川県書写書道教育研究大会

- 「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」
- 豊かな体験を通して感動する心を求めて—
- 文字意識を高めるための基礎基本のあり方—
- [金沢市立鳴和中学校]
- ・公開授業（中学校1年）
- ・記念講演「学習指導の最適化のために」
久米 公先生（千葉大学教授）

1993. 11.11 第4回石川県書写書道教育研究大会

- 「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」
- 豊かな体験を通して感動する心を求めて—
- 文字意識を高めるための基礎基本のあり方—
- [石川県立金沢商業高等学校・金沢市立富樫小学校・石川県立金沢泉丘高等学校]
- ・公開授業（小学校3年）（高等学校1年）
- ・記念講演「江戸時代の書教育—川柳に見る手習い—」
田中 東竹先生（実践女子大学教授）

1994. 10.19 第5回石川県書写書道教育研究大会

- 「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」
- 文字意識を育て自ら学ぶ意欲を高める書写指導のあり方—
- 古典との出会いを大切に感動を分かち合う心を求めて—
- [小松市立女子高等学校・小松市立安宅小学校]
- ・公開授業（小学校6年）（高等学校1年）
- ・記念講演「文字感覚を養い自ら学ぶ意欲を高める書写書道教育のあり方」
柳下昭夫先生（東京家政大学講師・前教育課程審議会委員）

1995. 10.20 第6回石川県書写書道教育研究大会

- 「基礎・基本をふまえて、豊かな心を育てる書写書道教育」
- 知的な遅れを持つ生徒における余暇指導—書道を通して—
- 自己批正とペア学習を生かし、文字意識を高める書写学習のあり方—
- [ラピア鹿島・鹿島町立越路小学校]
- ・公開授業（小学校5年）研究発表（養護学校）
- ・記念講演「漢字は生きている」

- 9.20 第1次案内発送
『石川県書写書道教育』（第11号）発行
- 10.19 第6回石川県書写書道教育研究大会〔ラビア鹿島・鹿島町立越路小学校〕
第15回理事会
11. 8 第49回石川県書写書道教育懇談会〔金沢大学教育学部〕
12. 1 第6回石川県書写書道教育研究大会反省会〔七尾市：「叶」〕
12. 6 第50回石川県書写書道教育懇談会〔金沢：「フランダース」〕
1996. 1. 第51回石川県書写書道教育懇談会〔金沢：「フランダース」〕
(平成8年)2. 8 第52回石川県書写書道教育懇談会〔金沢：「みの香」〕
3. 『石川県書写書道教育』（第12号）発行
- 4.17 第53回石川県書写書道教育懇談会〔金沢大学教育学部〕
- 4.25 第16回理事会〔金沢商業高等学校〕
- 5.21 第55回石川県書写書道教育懇談会〔金沢泉丘高校〕

第7回石川県書写書道教育研究大会経過報告

6. 6 第14回理事会〔金沢商業高等学校〕
第7回石川県書写書道教育研究大会第1回実行委員会
第7回石川県書写書道教育研究大会要項決定
- 7.18 第56回石川県書写書道教育懇談会〔金沢泉丘高校〕
- 8.10 第1次案内発送
- 8.29 県大会準備会（第57回石川県書写書道教育懇談会）〔金沢市立西南部小学校〕
10. 『石川県書写書道教育』（第13号）発行
- 10.10 第2次案内発送
- 10.17 第58回石川県書写書道教育懇談会（金沢大学教育学部）
- 10.25 公開授業指導案検討会〔七尾地方教育事務所〕
- 10.28 研究発表（中学校）検討会〔金沢市立犀生中学校〕
- 10.30 県大会準備会（第59回石川県書写書道教育懇談会）〔金沢市立西南部小学校〕
- 11.14 第7回石川県書写書道教育研究大会第2回実行委員会〔金沢中央高校〕

平成8年度 石川県書写書道教育連盟役員 (敬称略)

名誉顧問 金子曾政<元金沢大学学長>

顧問 寺西盛雄<石川県教育長>

相談役 北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 水田茂良 横西 清

参与 吉田一郎 森川登夫 ☆木本峰生 ☆谷村修次 ☆南 進

会長 藤 則雄<前金沢大学教育学部長>

副会長

[石川県教育委員会学校指導課長]	☆西谷 隆
[石川県私立幼稚園協会理事長]	源 通 <妙源寺幼稚園園長>
[金沢市小学校教育研究会書写部長]	河本隆成<金沢市立西南部小学校校長>
[金沢市中学校教育研究会書写部長]	☆富樫慶樹<金沢市立小將町中学校教頭>
[石川県高等学校教育研究会書道部会長]	☆田畑武正 <県立津幡高等学校校長>
[石川県特殊教育諸学校校長会代表]	☆平杉吉次 <県立養護学校校長>
[石川書写の会会長]	☆山雄捷悦 <七塚町立外日角小学校長>
[金沢大学(教育学部)書写書道教育担当者]	押木秀樹<金沢大学教育学部助教授>

理事長 ☆押木秀樹< 兼 任 >

副理事長：幼・保部：

：小学校部： 林 道子<金沢市立中央小学校教諭>[市小教研書写副部長]
丹後誠仁<鹿島町立久江小学校長>
☆永井志津子<七尾市立小丸山小学校長>
☆北野勝彦<小松市立国府小学校長>
：中学校部： ☆桶成好江<鹿島町立鹿島中学校教諭>
：高校部： 林 昭悦<県立津幡高等学校教諭>
：盲・ろう・養護学校部： 田中行雄<黓明和養護学校教頭> [県特殊教育諸学校
教頭会理事長]

監事 奥井絹江<七尾市立德田小学校長> 松本勝雄<中島町立熊木小学校長>
☆中山武久<県立金沢泉丘高校教諭>

理事

* 石川県教育委員会

[小学校・中学校(国語科書写)担当指導主事] 帽子山瑞枝<七尾市立教育センター指導主事>
[高等学校(芸術科書道)担当指導主事] ☆表 純一 <学校指導課指導主事>

* 金沢地区

- : 幼・保部: 青山洋子<みどり・かわい幼稚園副園長>
- : 小学校部: 大浦 努<花園小学校教諭> 中川晃成<菅原小学校教諭>
- : 中学校部: 福島絹子<長田中学校教諭> 占本住世<芝原中学校教諭>
- : 高校部: 石浦義彦<金沢伏見高校教諭> 永江芳教<金沢商業高校教諭>
久田英夫<金沢中央高校教諭>
- : 大学部: 北室正枝<金沢美大講師>
- : 盲・ろう・養護学校部:

* 加賀地区

- : 小学校部: 表 英治<片山津小学校長> 阿戸壮一郎<小松市教委学校教育課長
川筋登史己<犬丸小学校長>
- : 中学校部: 小座間美智子<錦城中学校教諭>
- : 高校部: 東野洋子<小松市立高校教諭>

* 能登地区

- : 小学校部: 福田教導<越路小学校教頭> 濱 和子<豊川小学校教頭>
野村美智子<石崎小学校長>
- : 中学校部: 山田寿一 <七尾地方教育事務所管理主事>
- : 高校部: 齋喜代子<県立水産高校教諭> 大場豊治<七尾城北高校教諭>
- : 盲・ろう・養護学校部: 清水徳典<七尾養護学校教諭>

事務局

- : 事務局長: 永江芳教<金沢商業高校教諭>
- : 副事務局長: 中川晃成<菅原小学校教諭> ☆岩田稚子<森本中学校教諭>
- : 庶務部:
部長 ☆八田和幸<浅野川中学校教諭> 副部長・山口雅美<新竪町小学校教諭>
部員・北村千恵<南郷小学校教諭> ・山沢聡美<中海中学校教諭>
☆柿木千鶴<館野小学校教諭>
- : 会計部:
部長・佃さえ子<美川小学校教諭> 副部長・西尾恵美子<福岡小学校教諭>
部員・水上真由美<県立医王養護学校教諭>
- : 研究調査部:
部長・板橋法子<安宅小学校教諭> 副部長・北野京子<中条小学校教諭>
部員・寺井純子<蛸島小学校教諭> ・坂井雪絵<大根布小学校教諭>
・唐津清美 ☆西脇良樹<北星小学校教諭>
- : 会報部:
部長 ☆松井瑞代<大聖寺高校講師> 副部長 ☆田中学<松任高校教諭>
部員・中辻育代<浜小学校教諭> ・塩田由香<野々市中学校講師>
☆谷口美晴<作見小学校教諭> ☆磯野美佳<金大付属中学校講師>

(☆は新任)

第7回石川県書写書道教育研究大会役員 —敬称略—

顧問 金子曾政 寺西盛雄

参与 北西正二 坂口 敏 田島庄吉 久田久信 水田茂良 横西 清
吉田一郎 森川登夫 木本峰生 谷村修次 南 進

大会長 藤 則雄

副大会長 西谷 隆 源 通 河本隆成 富樫慶樹 田畑武正 平杉吉次
由雄捷悦 押木秀樹

実行委員長 河本隆成

副実行委員長 林 道子 丹後誠仁 永井志津子 北野勝彦 桶成好江
林 昭悦 田中行雄

実行委員 [部担当] [企画研修部] 久田英夫 福島絹子

[研究集録編集部] 石浦義彦

[記録部] 大浦 努 北室正枝

[会計部] 青山洋子 古本佳世

大会事務局 [事務局長] 永江芳教 [副事務局長] 中川晃成 岩田稚子

○はつ-7 [庶務部] 〇八田和幸 s 山口雅美 北村千恵 山沢聡美 柿木千鶴
s はつ7-7 (庶務部)

[集録編集部] 〇松井瑞代 s 田中 学 中辻育代 塩田由香
(会報部) 谷口美晴 磯野美佳

[記録部] 〇板橋法了 s 北野京了 坂井雪絵 寺井純子
(研究部) 唐津清美 西脇良樹

[会計部] 〇佃さえ子 s 西尾恵美子 水上真由美
(会計部)

石川県書写書道教育連盟 規約

- 第 1 条 (名 称) 本会は、石川県書写書道教育連盟と称する。
- 第 2 条 (本部・事務局) 本会の本部を金沢大学教育学部内におき、事務局を事務局長の在勤校におく。
- 第 3 条 (目 的) 本会は、授業研究を中心として、県内の幼稚園(保育園・保育所)・小学校・中学校・高等学校・大学(短期大学・専門学校)・障害児学校等の一貫した書写書道教育と書道文化の更なる充実発展に努めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。
- 第 4 条 (事 業) 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 関連する学会・研究会・内外諸機関等との連絡と協力
 - (4) 講演会・講習会の開催
 - (5) 調査研究
 - (6) その他必要な事業
- 第 5 条 (組 織) 本会は、県内の幼稚園(保育園・保育所)・小学校・中学校・高等学校・大学(短期大学・専門学校)・障害児学校の教員及び本会の目的に賛同するものをもって組織する。
- 第 6 条 (役 員) 本会に、下記の役員をおく。
- | | | | | | |
|------|-----|-------|-----|-----|-----|
| 会 長 | 1 名 | 副会長 | 若干名 | 理事長 | 1 名 |
| 副理事長 | 若干名 | 監 事 | 若干名 | 理 事 | 若干名 |
| 事務局長 | 1 名 | 副事務局長 | 若干名 | | |
- (1) 事務局には、次の六部を設け、各部とも、部長 1 名 副部長 1 名、部員若干名をおくものとする。
・庶務部・会計部・研究部・会報部・研修部・調査部
 - (2) 本会に、名誉顧問・顧問・相談役・参与を推戴することができる。
 - (3) 役員を選出と任期は、下記のように定める。
 - (I) 役員は理事会において選出する。
 - (II) 役員の任期は一か年とする。ただし、再任は妨げない。
- 第 7 条 (理事会) 本会の理事会は、本会の運営及び事業に関する重要事項を審議決定する
- (I) 理事会は、必要に応じて、会長が召集する。
 - (II) 理事会は、第 6 条における、会長・副会長・理事長・副理事長・監事・理事・事務局長・副事務局長・事務局各部長によって構成する。
- 第 8 条 (会 計) 本会の経費は、会費及びその他の収入をもってこれにあてる。
- 第 9 条 (会計年度) 本会の会計年度は、4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。
- 第 10 条 (監 査) 本会の会計は、監事によって監査をうける。
- [附 則]
- 第 11 条 規約の改訂は、理事会の議決を経なければならない。

平成 元年 8 月 29 日 制定
平成 2 年 5 月 18 日 一部改正